

日本地質学会 *News*

Vol.26 No.7 July 2023



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理 事

任期：2022年6月11日から2024年総会

会長（代表理事） 岡田 誠（茨城大学）

副会長 杉田律子（科学警察研）
星 博幸（愛知教育大学）

常務理事 中澤 努（産業技術総合研究所）
副常務理事 緒方信一（中央開発（株））
執行理事 内尾優子（国立科学博）
内野隆之（産業技術総合研究所）
尾上哲治（九州大学）
加藤猛士（川崎地質（株））
狩野彰宏（東京大学）
亀高正男（（株）ダイヤコンサルタント）
小宮 剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森 樹（東北大学）
松田達生（工学気象研究所）
矢部 淳（国立科学博）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研）

理 事 青矢陸月（徳島大学）
芦 寿一郎（東京大学）
天野一男（東京大学空間情報科学研究センター）
磯崎行雄（東京大学）
大友幸子（山形大学）
大橋聖和（山口大学）

笠間友博（箱根町立箱根ジオミュージアム）
神谷奈々（同志社大学）
亀田 純（北海道大学）
川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）
北村有迅（鹿児島大学）
清川昌一（九州大学）
黒柳あずみ（東北大学学術資源研究公開センター）
桑野太輔（千葉大学）
小松原純子（産業技術総合研究所）
斎藤 眞（産業技術総合研究所）
佐々木和彦（佐々木技術士事務所）
沢田 健（北海道大学）
下岡和也（愛媛大学）
菅沼悠介（国立極地研究所）
高野 修（石油資源開発（株））
西 弘嗣（福井県立大学恐竜研究所）
野田 篤（産業技術総合研究所）
細矢卓志（中央開発（株））
保柳康一（信州大学）
堀 利栄（愛媛大学）
松田博貴（熊本大学）
三田村宗樹（大阪公立大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（東京都立大学）
山路 敦（京都大学）
山本啓司（鹿児島大学）

監 事

任期：2020年5月23日から2024年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.26 No.7 July 2023

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

京都大会ニュース……2

若手会員向けルームシェア型宿泊プランのご案内/「2023年度 学生のための地質系業界説明会」～その業界の仕事を知るためのサポートサービス～のお知らせ

一般社団法人日本地質学会2023年度総会記事……3

案内……27

JAAS年次大会2023「会いに行ける科学者フェス」

公募……27

令和5年度神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員(地質学(鉱物学))採用選考/大阪公立大学理学研究科地球学専攻 准教授(女性限定)公募

各賞・研究助成……27

2023年度「朝日賞」候補者推薦依頼/2023年度大型計算機共同利用公募研究/関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団助成事業募集/第45(令和5年度)沖縄研究奨励賞推薦応募

CALENDAR……29

博物館・ジオパークで地球を学ぼう! (19) ……30

鉱物・化石・岩石のアマチュア研究家のメッカ 公益財団法人益富地学会館(大井修吾)

TOPIC……32

Submap: a tool for mapping subduction zonesのご紹介(宮川歩夢)

表紙紹介……33

第14回惑星地球フォトコンテスト入選「一期一会の姿」(藤倉聖也)/訂正

地質学雑誌: 新しい論文が公開されています……34

巻末 会費口座振替依頼書

表3 入会申込書

事務局夏期休業のお知らせ

8月11日(金・祝)～15日(火)

学会事務局は上記の期間を夏季休業とさせていただきます。休業中のお問い合わせは、8月16日以降順次の回答とさせていただきます。ご不便をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます。

印刷・製本: 日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24

若手会員向けルームシェア型宿泊プランのご案内

日本地質学会第130年学術大会が2023年9月17日（日）～19日（火）の3日間開催されます。それに伴いまして、今大会では若手会員向けの宿泊施設をご用意いたしました。「若手同士の交流」と「低価格化」の観点から、本プランは、相部屋のご案内となっております。内容をよくご確認の上、ご確認ください。

<対象者>

若手会員（35歳以下の正会員）

<ルームシェア型宿泊プランの主旨>

「学会先での宿泊費を抑えたいけれど、ホテルの部屋をシェアする相手が見つからない...」「地質学会で仲間をつくりたい!」といった若手会員のために、日本地質学会ではこの度、「ルームシェア型宿泊プラン」を企画いたしました。学術大会での若手会員の宿泊先確保を支援し、若手同士の交流機会をつくることで、若手会員の皆様の研究活動をサポートしたいと考えております。是非、本プランをご活用いただき、研究仲間の輪を広げていただきたいと思います。

<申し込みにあたっての注意事項>※必ず、お読みください※

- ①男女別室の見知らぬ人同士の相部屋となります。お互いが快適に過ごせるよう、ご配慮をお願いいたします。
- ②若手の学術大会参加を支援するための企画です。学術大会への参加が必須事項ですので、その点をご留意ください。
- ③定員を超過した場合、学生・ポスドクを優先とさせていただきます。

きますので、予めご了承ください。

- ④キャンセルは原則禁止ですので、ご注意ください。

<宿泊プランの詳細・お申し込み方法>

- (1) 設定期間：2023年9月17日（日）～19日（火）（宿泊数は選択可。）
- (2) 宿泊施設：関西セミナーハウス（〒606-8134京都市左京区一乗寺竹ノ内町235-1-1）
URL：<https://www.kansai-seminarhouse.com>
修学院駅から徒歩約15分（会場まで市バスまたは徒歩で約40-50分）
- (3) 宿泊料金：一人 6,200円/1泊（食事なし・酒類を持ち込む場合は+500円/人）
- (4) 受入可能人数：最大23名（和室3室（8名、6名、6名）、トリプル1室、ツイン1室）
- (5) お申し込み方法：オンラインフォーム（右記のQRコードもしくは大会HPからお申し込みいただけます。
- (6) 申込締切：2023年8月18日（金）
- (7) お支払い方法：ご自身でホテルに直接お支払いください。



<お問い合わせ先>

日本地質学会若手活動運営委員会：ecg.core@gmail.com

「2023年度 学生のための地質系業界説明会」～その業界の仕事を知るためのサポートサービス～のお知らせ

専門就職をお考えの学生の皆様や業界を理解されたい教員の方々は、どうぞ奮ってご参加ください。

日本地質学会では、第130年学術大会（2023京都）の企画の一つとして、「2023年度学生のための地質系業界説明会」を開催いたします。学生（学部生や院生）の皆様は、将来の就職先の一つである地質系業界の実態や各社の業務内容などを知っていただくために開催する当学会の恒例行事です。

今年度は、学生を地質系業界に輩出したいとお考えの地質系学科に後援をいただき、大学、企業、学会が連携して高等教育を終えた専門技術者が社会で活躍・貢献できるようにしたいと考えています。

現状、下記の学科から後援をいただいています。

後援（7/7現在）：東海大学海洋学部海洋地球科学科/島根大学 総合理工学部 地球科学科/弘前大学理工学部地球環境防災学科/日本大学文理学部地球科学科 地球環境学プログラム/京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室/筑波大学地球科学 学位プログラム

(1) 対面説明会

- ①開催日時：2023年9月18日（月・祝）午後半日程度
- ②開催場所：京都大学吉田キャンパス（京都市左京区吉田本町）
- ③参加費無料（学部生・院生は、日本地質学会会員、非会員を問わず学術大会への参加登録は不要で参加費は無料です。ただし、その場合は学術大会の他の企画には参加できません。学術大会参加登録を行った学部生・院生は、本企画を含め学術大会のすべての企画に参加できます）

(2) オンライン説明会

- ①開催日時：2023年9月22日（金）午後
- ②開催方法：Zoomを用いたオンライン方式
- ③参加費無料（学生は、日本地質学会会員、非会員を問わず学術大会への参加登録は不要で参加費は無料です）
参加申込方法等詳細は、大会HPをご参照ください。
https://confit.atlas.jp/guide/event/geosocjp130/static/gyokai_support

お問い合わせ先：一般社団法人日本地質学会事務局
e-mail：main@geosociety.jp、電話：03-5823-1150

大会に関わる
おもな締切

巡検参加申込締切 8月8日（火）18:00 大会参加登録締切 8月31日（木）18:00

一般社団法人日本地質学会2023年度総会

一般社団法人日本地質学会 2023年度総会議事録

1. 日時 2023年6月3日（土）14:00～15:45
2. 場所 Zoomオンライン会議システムによるWEB会議形式
3. 出席役員
理事：岡田 誠（代表理事 会長）・杉田律子（副会長）・星 博幸（副会長）
青矢睦月，天野一男，磯崎行雄，内尾優子，内野隆之，大橋聖和，緒方信一，岡田 誠，笠間友博，加藤猛士，狩野彰宏，神谷奈々，亀田 純，亀高正男，北村有迅，桑野太輔，小松原純子，小宮 剛，斎藤 真，坂口有人，佐々木和彦，下岡和也，杉田律子，高嶋礼詩，高野 修，辻森 樹，中澤 努，西弘嗣，星 博幸，細矢卓志，保柳康一，堀利栄，松田達生，矢部 淳，山口飛鳥，山路敦 以上，理事36名
監事：岩部良子・山本正司 以上，監事2名

4. 議長および議事録作成者
総会開催にあたり定款24条に従い本日出席の代議員から，議長として平田大二代議員を選出した。
議長は審議開始に際し，オンライン会議システムにより，出席者が一堂に会するのと同程度の議論を行うことができる環境であることを確認した。次に総会規則第15条に従い書記として津野洋美代議員ならびに福地里菜代議員を指名し，同時に議事録署名人として，兩名を指名した。
5. 議事の経過の要領及びその結果
出席社員の確認
代議員（＝社員）総数 136名
議決権総数 136個
定足数 69個
出席者数 110名
（議場出席者51，議決権行使書40，委任状19）
議長は，出席者数を確認し，総会定足数である代議員の過半数69名をこえる出席者があるので成立している旨宣言し，議事に入った。

第1号議案 2022年度事業報告・決算報告・監査報告

中澤常務理事より，資料にもとづき2022年度の事業報告があった。昨年度行われた事業内容，執行理事会および理事会議決・承認事項について報告が行われた。学術大会を，2022年9月4～6日に早稲田大学をホスト校として開催した。ポスター発表は新型コロナウイルス感染を考慮しオンラインで開催したが，口頭発表は3年ぶりの現地開催を行い，盛況であった。地質学雑誌については，完全電子化前の前年を上回る数の投稿があり，好調な滑り出しをみせている。Island Arcの最

新IFは2.442と創刊以来の最高値を記録した。社会貢献については，特に地質技術者関連の活動が積極的に行われたことが報告された。JABEEシンポジウムをはじめ，地質系業界説明会が開催され，さらにキャリアビジョン誌が発行された。地学教育については，「令和5年度大学入学共通テストの地学関連科目に関する意見書」を取り纏め，他科目との得点数格差が改善されつつあるなどの肯定的な意見を含めたものが提出された。国際連携では，2024年IGC（韓国）で計画されていた竹島巡検や日本海表記に関する問題を受けた地質学会からのサポートレター撤回に関する説明があった。学会運営についてはダイバーシティ推進の取り組みとして，選挙規則の改正の着手，早稲田大会セッションへの「ダイバーシティ認定ロゴ」導入，加えて表彰制度の見直し，学生優秀発表賞を設置することを検討した。若手育成事業は竹内圭史会員からの寄付金をもとに，研究奨励金支給制度，フィールドワーク賞を新設した。若手有志による活発な活動を受け，正式に若手活動運営委員会が発足した。また，新しい会員管理システムを導入し，クラウドサービス上で会員が情報更新，検索ができるようになった。

会員の動静では，2022年4月末に比べ72名会員数が減少したことが報告された。なお，2022年5月から2023年5月までに逝去された会員および今年度において逝去が判明した会員15名（うち名誉会員4名）に対し，黙祷を捧げた。また，永年会員顕彰は，今年度から在会年数40～70年の10年ごとに顕彰を行うこととなり，今年度は77名の会員を顕彰することや，各賞選考委員会による各賞受賞者の提案が承認されたことなどが報告された。さらに，2023年度研究奨励金支給対象者5名の報告があった。最後に，今年度は，磯崎行雄会員，小泉明裕（故人）会員からご寄付をいただき，謹んで篤志をお受けした旨報告があった。

1）会計担当の亀高理事から，2022年度決算について報告があった。2022年度は単年度約340万円の黒字で引当金の取り崩しもなかったことが報告された。2022年度の会費収入は，会員数は減少しているものの，今年度は新規入会者数が増えたこと及び過年度未払分の納入による収入で増加している。オンライン化以前と比較して，雑誌販売収入は大幅減であるが，支出もそれを上回って減少していることから，大きく収支が好転していると報告した。普及事業収入では，キャリアビジョン誌と地質系業界説明会の収益が増加した。支出では，出版事業費が，紙代や改版代が値上がりしていることが増加につながった。年会開催事業支出は，現地開催を行ったが支出が少なく，

コンパクトな開催であったといえる。一昨年から続く新型コロナの影響で支部，専門部会の活動は支出が少なかった。管理費は，クラウド会員システムのサーバー管理，構築の費用が大きい，事務局職員の退職に伴い人件費が減少し，また選挙システムの構築が翌年に持ち越しとなったため，支出が少なくなった。更に，地質学雑誌のオンライン化の恩恵があり，これとセットで実施する学生・院生に対する会費減額の適用が2023年度からであることや，新型コロナの影響で引き続き野外活動が減少していることから，2022年度は例外的に収支が好転している。

2）その後，岩部良子監事より監査報告があり，事業報告および計算書類等について適正であることが報告された。

本議案について採決の結果，全会一致（議場51，議決権行使書40，委任状19）で承認された。

第2号議案 2023年度事業計画

岡田会長より，2022年度の本学会の事業成果を踏まえた2023年度の事業計画の基本方針が示された。豊かなダイバーシティのもと学術活動を進めると同時に，健全な経営を行うことを目指していくと説明があった。京都大会は9月17日（日）～19日（火）に口頭，ポスターとも現地開催を目指して準備している。また，2020年から開始したショートコースが非常に好評であり，その定着・整備に努める。そして，会員に学べる場を提供し続け，会員の満足度を高めることが，会員の定着率を上げ，会員数減少の歯止めとなるとして引き続き推進することが説明された。広報・普及活動では，社会貢献のために学会の認知度を高めることが重要であり，web，SNS発信を強化し，学会ホームページ（以下，HP）もわかりやすいものに刷新し，社会への速報性を高めていく。国際連携については，学術交流協定を4学会（台湾，モンゴル，タイ，英国）と締結しているが，大韓地質学会とは現在保留となっていることが説明された。会員サービス・学会運営については，新規会員獲得を積極的に行う。特に，学生会員獲得に注力する。また新しい会費バック制度を活用してもらい，学生や若手会員が卒業後も継続して学会に残ってもらえるようにするとともに，若手活躍の場をひろげていく。そのために，学会組織や規則の整備が同時に必要となる。

第2号議案について要望・質問があった。学術大会HP（Confitサイト）がネット検索の上位に表示されるように対策してほしいとの要請があり，加えて学術大会トピックセッションに対するダイバーシティ認定ロゴ付与

2022年度事業実績概要

1. 学術大会

【早稲田大会】学術大会を早稲田大学をホスト校として2022年9月4～6日に開催した。政府等の新型コロナウイルス感染症対応方針を考慮し、口頭発表は3年ぶりの現地開催とした。一方、ポスターセッションは、今年度も参加者の感染防止策を十分に講じることができないという判断から9月10～11日に別途オンラインでの開催とした。講演数は389件（うち口頭297件）、参加登録者数686名と、久しぶりの現地開催としては期待を上回る件数・人数であった。また表彰式・記念講演会や地質巡検、ランチョン・夜間小集会、市民講演会、地質情報展、企業展示、地質系業界説明会等の関連イベントも現地開催され、盛況裏に大会を終えることができた。

【大会運営】運営方法について検討を重ね、3年ぶりの現地開催の大会ではあったが無事に開催することができた。また大会の演旨登録やプログラム編成にオンラインシステムを導入し、大会準備に関わる行事委員会と事務局の業務軽減に努めた。

2. 学術研究活動

【マスタープラン】地球惑星科学系最大の学会として学術発展に寄与するために、2019年度に学会主導で内閣府に提案し採択された大型研究計画（マスタープラン2020）をさらに発展させ、関連する他の学会・研究機関の協力のもと、日本学術会議「未来の学術振興構想」の「学術の中長期研究戦略」に「宇宙・地球研究資料のアーカイブ化とキュレーションシステムの構築」を申請した。

【ショートコース】一昨年度に名古屋大会代替企画としてスタートしたショートコースを今年度も引き続き開催した。最新の地質学研究のレビューなど多彩なトピックを企画し、会員・非会員を問わず多くの方々（73名）にご参加いただいた。

3. 出版活動

【地質学雑誌】地質学雑誌は、令和4年1月から冊子印刷・配布を廃止し完全電子化を図った。これに伴い編集出版体制の見直しを図るとともに、電子版投稿編集出版規則および関連する細則を作成した。カラーチャージの廃止とJ-STAGE Dataへの参加により、今までよりも論文の情報量を格段に増加させることが可能となった。結果として、完全電子化前の前年を上回る数の投稿があった。

【Island Arc誌】Island Arc誌を継続して出版した。投稿から査読を経て受理・オンライン公開までの時間短縮の努力し、最新のIFは2.442と創刊来の最高値を記録した。今後

第3号議案について、「学生会員新規100名入会は現実的か？」という質問に対し、亀高理事から「実績から見て、現実的な数字である。社会人で入会する人は多くない。学生時代に入会し、その後継続して在会する会員が多いので、ぜひ学生に入会してもらいたい」旨回答があった。

＜参考：過去の入会者の内訳＞

2019年：120名（正会員20名 学生100名）/
2021年：112名（正会員27名 学生85名）/
2022年：123名（正会員43名 学生80名）

次に新設の学生優秀発表賞に対する賞金の有無について質問があり、亀高理事から「賞金はない」と回答があった。

本議案について採決の結果、賛成多数（議場50、議決権行使書39、委任状20）、保留1（議決権行使書1）で承認された。

4号議案 名誉会員の選出

星副会長より、推薦候補者2名について紹介があった。

本議案について採決の結果、全会一致（議場50、議決権行使書40、委任状20）で承認された。

5号議案 運営規則および選挙規則の変更

杉田副会長より、表彰に関する規則と選挙細則の変更の説明があった。表彰に関する規則については、運営規則、第7章表彰、第16条、第12項の優秀ポスター発表賞の廃止と学生優秀発表賞の新設について経緯を含めた説明があった。選挙規則の変更については、ダイバーシティ推進の観点から若手や女性の理事確保のために、最新の会員構成比に応じて理事の議席定数を定めることとする。また定数の定め方の詳細は細則で定めることとし、該当の付表も規則から細則に移動する旨説明があった。

本議案について採決の結果、全会一致（議場50、議決権行使書40、委任状20）で承認された。

以上をもって全ての審議を終了した。最後に岡田会長より、「規則変更によって役員選挙の電子投票も可能となり、地質学会の形も一歩前進する。今年は学生会員の増加を目指し、大学関係者には、例年の1.5倍の学生を勧誘してほしい。毎年100人前後の新規会員がいる一方、200人前後が退会する。学生会員には卒業後も学会を継続してもらいたい」と強く望む挨拶があり、その後議長は閉会を宣言した。

2023年6月20日

以上、決議を明確にするためこの議事録を作成し、議長、副議長および出席理事がこれに記名、押印する。

一般社団法人日本地質学会2023年度総会

総会議長	平田大二
議事録署名人	津野洋美
議事録署名人	福地里菜

の対応について、行事委員会とジェンダー・ダイバーシティ委員会（以下、ダイバーシティ委員会）の連携不備が指摘された。前者については、岡田会長から改善する旨の回答があり、後者については、高嶋行事委員長より、認定ロゴ付与について、ダイバーシティ委員会と調整中であるが、対応が出遅れたとの反省の弁があった。

別途、現ダイバーシティ委員より、任期、委員の選考基準とその方法、委員会規則の存在の有無について質問があった。これに対して堀ダイバーシティ委員長から、委員会規則は存在し、任期や選考基準が定められている。それに則り、性別、年齢のバランスを考慮して委員構成を考えて推薦している。更に、杉田副会長からは、学会の全規則類がHPに掲載されている状況ではないので、誰もが見られるように検討・整備を進めていると説明があった。

学会HPの刷新については提供する情報の精選、方向性やその担当者について質問があった。それに対して、岡田会長から、現在広報委員会が仕様策定、業者選定を進行中との回答があった。

本議案について採決の結果、全会一致（議場51、議決権行使書40、委任状19）で承認された。

なお、代議員1名が第2号議案採決終了後、委任状提出の上、退席した。

第3号議案 2023年度予算案

亀高理事から、2023年度収支予算案について説明があった。会員数は減少予想であるが、学生会員100名の新規入会を見込んでおり、会費収入は昨年度より増額を見込んでいる。事業収入は、雑誌販売収入増（特集号等オンデマンド印刷版の販売）と前年度実績に即して雑誌印刷負担金収入増を見込んで大幅増額。年会開催事業収入は、現地開催の予定で参加者数増を見込んでいる。普及事業収入は、特にショートコースが2回以上の実施を予定しており、雑収入は、地質系業界説明会やキャリアビジョン誌で昨年同様の収入を見込んでいる。支部・部会等活動事業収入は、今年は新型コロナ感染症の影響がなくなると想定し増額した。今年度からの新規項目である若手育成事業収入については、若手運営委員会主催の巡検参加費収入を計上している。

支出についても、出版事業は特集号や実績に合わせた増額。年会開催事業では、京都大会は会場費等の負担が大きいことが予想されるため増額。支部部会等活動事業はコロナの影響がなくなり野外活動等の増加を想定し増額した。新規の若手育成事業は、巡検参加費補助・フィールドワーク賞賞金・研究奨励金などを計上した。管理費には、学会HPリニューアル費用を計上し、会員管理システムの保守サポートと選挙システムの作成代が計上されている。全体として収入よりも支出の増加が顕著で、不足分は引当金を取り崩す見込みである。

のさらなるIFのアップのために、理事を始めとし会員に広く投稿と同誌掲載論文についての積極的な引用を促すとともに、特集号等企画など種々の観点からの検討を実施した。

【ニュース誌】 ニュース誌を毎月刊行し、最近の研究動向や学会運営状況などの情報提供に努めた。また学会HPにニュース誌のPDFファイルを掲載した。

【ジオルジュ】 公式広報誌であるジオルジュについては、より多くの市民の目に触れるようフリーペーパー化の推進を図るとともに配布地点を拡充した。同時に協賛記事の強化により経費の圧縮策を講じた。

4. 地質災害対応

【災害対応】 令和4年8月の東北・北陸地方の豪雨災害や令和4年9月の台風14号による災害に関して、学会HPを通じて、会員ならびに関連機関の調査等の情報を積極的に発信した。

5. 普及活動

【フォトコンテスト】 第14回惑星地球フォトコンテストを開催し、359点の応募作品の中から最優秀賞をはじめ12点の入選作品を選出した。また第13回フォトコンテストの入選作品展示会を都内のギャラリー（東京パークスギャラリー [上野グリーンサロン内：台東区上野公園]）で2022年5月3日（火・祝）午後～15日（日）に開催した。

【地学オリンピック】 地学オリンピックには地学オリンピック支援委員会を中心に継続的に支援を行っており、本年度も第16回国際地学オリンピック2023大会の予選となる第15回日本大会への開催協力を行った。第15回国際地学オリンピックはオンラインで2022年8月25～31日に実施され、34か国から204名の参加があった。日本代表の4名全員が入賞した（金メダル1名、銀メダル2名、銅メダル1名）。

【こどもサマースクール】 地震火山地質こどもサマースクールは当学会が継続的に支援を行っている事業であり、サマースクール連合企画委員会および運営委員会における検討に参画している。今年度は第21回地震火山地質こどもサマースクールin浅間山北麓ジオパークの企画・運営に協力し、8月17日と18日に1泊2日の日程で現地開催された。また来年度は神奈川県平塚市で開催する予定で、それに向けて準備をすすめた。

【地質の日】 地質の日イベントとして、オンラインでの普及講演会を5月8日に開催し、多数の参加者を集めた。YouTubeでの配信も行い、視聴数はこれまでに1300回を超えた（3/31現在）。また街中ジオ散歩イベントを東京国分寺崖線で開催したほか、惑星地球フォトコンテスト入選作品の展示会を都内ギャラリーで実施した。支部においても、各地で講演会が企画・実施され、地質学の普及に努めた。

6. 社会貢献

【地質標準関係】 国際層序委員会の国際年代

層序表に基づき、GSSP新規策定を反映した日本語版層序表の改訂を行い、学会HPにて公開した。

【地質技術者関係】 JABEE 地球・資源分野の運営や認定プログラムの継続審査に参画し、JABEEを普及させるために、昨年度に続いてJABEEシンポジウムを企画するとともに、高等学校生向けの啓発ポスターを作成し送付した。また、主に企業会員向けには「土質・地質技術者の生涯学習ネット（GEO-Schooling Net）」を利用して企画する講習会・見学会の情報を提供し、参加者にCPD証明書を発行した。例年学術大会に併せて企画している業界研究サポートでは、学生のための地質系業界説明会を対面およびオンラインのそれぞれで開催し、多くの学生が参加した。また、就職支援プログラムとして、地質系若者のためのキャリアビジョン誌を、今年度も発行した。

【ジオパーク】 ジオパークについては、ジオパーク支援委員会を中心に、JGN（日本ジオパークネットワーク）およびJGC（日本ジオパーク委員会）への協力を進めたほか、新たに学術団体が中心となって組織されたジオパーク学術支援連合会（JGASU）の運営に主要学術団体として携わった。また市民対象のシンポジウムを開催した。

7. 地学教育

【大学入試】 令和5年度大学入学共通テスト（本試験）の地学関連科目「地学基礎」「地学」の問題を確認し、「令和5年度大学入学共通テストの地学関連科目に関する意見書」を取り纏め、大学入試センターに提出した。

【Web教材】 「ゆめ基金」助成金により小～中学生を対象として作成された教育用Web教材「ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう」については、学会HP等による周知により、ウェブの閲覧数は順調に伸び、広く浸透しつつある。

【ジュニアセッション】 小中高校生の地質学に関連した研究成果発表ポスターを募集した結果、今年度は17件の応募があり、早稲田大会のポスターセッションに併せてオンラインで発表が行われた。すべてのポスターに対して評価・コメントを行い、これらの中から3件の優秀賞と4件の奨励賞を選出し、表彰した。

8. 国際連携

【学術交流協定】 学術交流協定を締結しているタイ地質学会、モンゴル地質学会、ロンドン地質学会、台湾地質学会、大韓地質学会との交流を継続した。2024年に韓国釜山で開催予定のIGCについては、大韓地質学会との学術交流協定に基づき2016年にサポートレターを送付し、開催へのサポートを表明していたが、昨年度にIGC公式ホームページに日本側の了解を得ないまま日本国内の巡検コース案が掲載され、その巡検コース説明に「日本海」の不適切な呼称および韓国側の「竹島巡

検」企画が含まれていることが明らかになった。これらの点の再考を韓国IGC-LOCに強く要望してきたが、要望は聞き入れられなかったため、当学会からサポートレターを撤回する旨を2022年9月に韓国IGC-LOCに通知した。これら経緯の詳細については学会HPに掲載し、広く周知した。

9. 学会運営

【事業運営】 昨年度に行った学会財政の見直しを踏まえた各事業の実行にあたり、事業目的の達成度と効果の確認を踏まえて各事業の健全化に努めた。また新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、支部例会や総会等の行事開催にあたっては適切な対応を求め、会員・一般参加者の健康、ならびに公衆衛生に配慮した。会員減少抑制策、会計収支改善策として、昨年度までに検討・策定した新たな会員区分・会費システムを会員に広く周知し、順次実施した。

【ダイバーシティ推進の取り組み】 ジェンダーダイバーシティ推進委員会の助言に基づき、学会運営に携わる主要な委員会のメンバー構成についてダイバーシティの配慮に努めた。また早稲田大会のセッションに「ダイバーシティ認定ロゴ」を導入し、ダイバーシティ推進の見える化を実施した。若手や女性の意見を学会運営に反映させることを目的として、選挙制度の改正に着手した。

【表彰制度の見直し】 優れた研究、地質学の発展・普及等に貢献された方々を適切に評価し、学会のさらなる活性化を図ることを目的として、一昨年度より学会の賞制度について見直しをすすめているが、今年度は特に賞の趣旨の理解促進のため各賞の平易な解説文を作成し、各賞候補者募集の前に会員に周知した。また学術大会の優秀ポスター賞を廃止し、新たに口頭発表をも対象とした学生優秀発表賞を設置することを検討した。

【若手育成事業】 野外調査をベースとした若手地質研究者の育成を目的として、研究奨励金支給制度の設置を検討し、規則等を整備したうえで募集を行った。また今年度より新たに設けられた若手の野外地質研究を対象とするフィールドワーク賞の候補者募集を行った。

【会員サービス】 会員に対しては、ジオフラッシュやHP、ニュース誌を通じて、さまざまな参加行事の広報を継続的に行った。試験運用中の学会公式SNSにおいても学会関連の情報発信に努めた。またショートコースの開催、企業会員へのCPD証明書の発行、学生・院生会員への就職支援プログラム等を通じて学術発表以外のメリットの増大を目指した。さらに、若手有志が企画した学部学生・大学院生向けの地質系業界オンライン交流会を開催し、地質学に関わる企業・官公庁等で働く若手職員との座談会を実施した。

【会員管理システム】 会員管理システムについて、現行のスタンドアロン版からクラウド版への移行作業を行い、運用に向けた準備を行った。

【事務局体制】 学会事務局について、業務内容分担を再確認するとともに、新たな組織・人員体制による業務の整理統合と効率化、ならびに諸規則の整備による継続的な事務局業務の推進を実施した。

以上

2022年度事業経過報告

1. 報告事項

1) 会員の動静

2023年4月末現在の会員は、賛助会員27社、名誉会員37名、正会員3087名（一般：2118名、シニア：856名、学生：113名）、会員総数3151名、2022年4月末と比べて72名の減少であり、その内訳は次のとおりである。

入会者123（賛助0社、正会員123名）
退会者118（賛助0社、正会員118名）
除籍者62（正会員62名）
逝去者*15（名誉会員4名、正会員11名）
名誉会員：端山好和（逝去日：2022/2/26）、石田志朗（5/19）、加藤誠（6/26）、秋山雅彦（11/2）
正会員：松井和典（2022/3/10）、小宮学（4/29）、近藤浩文（5/19）、菊池康浩（5/31）、粕倉紀久（7/26）、阪口和之（8/7）、浦川洋一（8/18）、鈴木養身（9/3）、佐藤光男（10/25）、阿部龍市（12/19）、小泉明裕（2023/1/1）

*2022年5月から2023年4月末日までに届出のあった方々。

2) 学会運営に関する諸集会及び委員会等の活動

＜2022年度定時総会＞

日時：2022年6月11日 14:00～15:45、WEB会議形式

議決権のある社員総数 105名（定足数：53名）、議決権の数 105個

出席社員数（委任状および議決権行使書提出者を含む）84名、

議決権の総数 84個、出席理事 36名、出席監事 2名

審議事項：1) 2021年度事業報告・決算報告・監査報告、2) 代議員および理事選挙結果報告、3) 2022年度事業計画、4) 2022年度予算案、5) 名誉会員の選出、6) 定款の変更、7) 運営規則および総会規則変更

いずれの議案も賛成多数で承認。

＜委員会等の開催＞

・執行理事会（12回）議事内容、報告等については、随時HP、ニュース誌に掲載
・理事会（5回）議事内容、報告等については、随時HP、ニュース誌に掲載
・その他委員会（WEB会議またはメールによる会議を含め、随時開催）

3) 学会の行事・事業

1. 第129年学術大会（2022東京・早稲田大

会）
会期：口頭発表（対面）：2022年9月4日（日）～6日（火）

ポスター発表（e-poster）：9月10日（土）～11日（日）

会場：早稲田大学早稲田キャンパス（東京都新宿区）

参加者：686名（会員601名、非会員85名）

・一般発表申込：367件（口頭275件、ポスター92件）

・シンポジウム：2件（S1.口頭7講演／S2.口頭15講演）

・アウトリーチセッション（e-posterのためなし）

・緊急展示ポスター（なし）

・優秀ポスター賞の授与：8件

・巡検：実施8コース（B,C,D,E,F,G,H,I）、中止1コース（A）

・ランチョン：専門部会を中心に実施11件（9/4：3件、9/5：6件、9/6：2件）

・夜間小集会：実施5件（9/5のみ）

＜日本地質学会各賞の授与式・記念講演会＞
日時：9月4日（日）15：30-17：40、会場：早稲田大学14号館201教室

・来賓挨拶 若林幹夫氏（早稲田大学教育・総合科学学術院 院長）

・日本地質学会小澤儀明賞受賞スピーチ 石輪健樹会員（国立極地研究所）

「海水準データとGIAモデルから読み解く南極氷床変動史」

・日本地質学会棚山雅則賞受賞スピーチ 岡崎啓史会員（広島大学大学院先進理工系科学研究科）

「地球内部でおこる多様な変形と物質循環の理解を目指して」

宇野正起会会員（東北大学大学院環境科学研究所）

「プレート収束帯の動的な流体活動に関する研究：“時空間スケールの壁”に挑戦する動的な岩石学を目指して」

・日本地質学会H.E.ナウマン賞受賞スピーチ 片山郁夫会会員（広島大学大学院先進理工系科学研究科）

「地球史を通じた海洋の持続的な存在とこれから」

・日本地質学会功績賞受賞記念講演 高橋正樹会会員（日本大学文理学部）

「日本の地質学革命期における花崗岩研究と私1974～1986年」

＜関連行事＞

・地質情報展2022とうきょう一都心の地下を探る一、9月3日（土）～5日（月）、参加者：約1500名

・市民講演会「関東の自然災害と防災」、9月4日（日）、講師：宍倉正展会会員（産総研）、山崎晴雄会会員（都立大学）、土屋信行氏（公財リバーフロント研究所）、参加者：約110名

・家族巡検「生命の進化を楽しく学ぼう」（関東支部企画）、9月3日（土）、参加者14名（うち、子供5名）、講師（午前：上野動

物園）犬塚則久氏、（午後：国立科学博物館）對比地孝亘氏

・第20回日本地質学会ジュニアセッション（e-posterによる審査）、9月11日（日）、参加校15校・1団体、17件、うち3件に優秀賞を、4件に奨励賞を授与。

・学生のための地質系業界説明会（地質技術者教育委員会企画）：参加企業：35社

対面説明会（早稲田キャンパス）、9月5日（月）、参加企業24社

オンライン説明会（zoom）、9月16日（金）、参加企業31社

・学生・若手研究者のための交流会（若手有志会企画）

現地交流会（早稲田キャンパス）、9月5日（月）、参加者60名

オンライン交流会（zoom）、9月10日（土）、参加者19名

・地質学露頭紹介（第3回）、9月11日（日）、13:30～14:40、zoom、参加者：約60名、紹介者：山口飛鳥会会員（東京大学大気海洋研究所）、窪田安打会会員（応用地質（株））、竹下徹会会員（北海道大学総合博物館資料部）、星博幸会会員（愛知教育大学）、高嶋礼詩会会員（東北大学総合学術博物館）、岡田誠会会員（茨城大学）

2. 地質の日ほか、本部イベント

・地質の日オンライン一般講演会、5月8日（日）9:00-12:00、YouTubeによるライブ配信。

講師：斎藤真会会員（産総研地質調査総合センター）、鹿野和彦会会員（元鹿児島大学総合研究博物館）、当日視聴者数約150名。

・街中ジョ散歩ミニ in Tokyo「国分寺崖線」徒歩見学会（日本応用地質学会との合同主催行事）、5月15日、参加者14名、講師：山崎晴雄会会員（都立大学）

・惑星地球フォトコンテスト第13回ほか入賞作品巡回展示（2022年4月～2023年3月）

東京パークスギャラリー（上野グリーンサロン内、台東区上野公園）、5月3日（火・祝）～15（日）[第12・13回入選作品]

地質情報展2022とうきょう一都心の地下を探る一、9月3日（土）～5日（月）[第13回入選作品、入選作品の画像ファイルを再生]

蒲郡生命の海科学館、2023/1/28（土）～4/9（日）[第13回入選作品]

地質情報展2023いわて一明日につなぐ大地の知恵一、2023年3月10日（金）～12日（日）[第13回入選作品、入選作品の画像ファイルを再生]

3. ショートコース（オンライン形式）

・第6回ショートコース、12月18日（日）、受講申込者数：73名、講師：＜午前＞杉田律子会会員（科学警察研究所）、＜午後＞山口飛鳥会会員（東京大学大気海洋研究所）

・第7回ショートコース、2023年4月2日（日）、受講申込者数：69名、講師：＜午前＞

佐藤活志会員（京都大学）、<午後>大坪誠会員（産総研・地質調査総合センター）

4. その他：オンライン形式のシンポジウム・ワークショップ

- ・日本学術会議公開シンポジウム「チバニアン、学術的意義とその社会的重要性」（日本地質学会ほか共催）、5月24日（火）13:00～17:10、場所：日本学術会議講堂（ハイブリッド形式）
- ・地質学露頭紹介（第2回）at JpGU2022（JpGUでの共催セッション）、5月29日（日）、14:00～15:15、zoom・YouTubeでのライブ配信、紹介者：辻智大会員（山口大学）、早坂康隆会員（広島大学）、木村英人会員（興亜開発（株））、星博幸会員（愛知教育大学）、竹下徹会員（北海道大学）、木戸聡会員（福井県立敦賀高校）、参加者約40名、公開～2023年3月末までの視聴回数：967回
- ・市民対象オンラインシンポジウム「ジオパーク地域に伝わる伝承と地質学：古代からの自然観を今に活かす」（ジオパーク支援委員会企画、共催：日本ジオパークネットワーク（JGN）・日本ジオパーク学術支援連合（JGASU））、2023年1月28日（土）、10:00～14:25、zoom・YouTubeでの配信、講演者：野村律夫会員（島根半島・宍道湖中海ジオパーク）、大野徹人氏（アボイ岳ユネスコ世界ジオパーク）、竹谷陽二郎会員（磐梯山ジオパーク）、竹之内耕会員（フォッサマグナミュージアム）、関谷友彦会員（下仁田ジオパーク）、荻野慎譜氏（恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク）、此松昌彦会員（和歌山大学教育学部）、先山徹会員（NPO法人地球年代学ネットワーク）、山崎由貴子氏（日本ジオパークネットワーク）、参加者270名、公開～2023年3月末までの視聴回数：1349回
- ・地質系業界オンライン交流会（若手有志会企画）、2023年2月17日（金）、19:00～21:00、参加者約35名
- ・第3回JABEEオンラインシンポジウム「大学—企業の架け橋教育 ユニークな事例紹介」（地質技術者教育委員会企画）、2023年3月5日（日）、13:30～18:00、zoom・YouTubeでの配信、講演者：亀井淳志会員（島根大学）、竹内真司会員（日本大学）、坂口有人会員（山口大学）、板谷徹丸会員（特定非営利活動法人地球年代学ネットワーク）、島田邦明氏（学校法人ジオパワー学園掘削技術専門学校）、稲垣秀輝会員（株式会社環境地質）、参加者約140名、公開～2023年3月末までの視聴回数：160回
- ・地質情報展2023いわて—明日につなぐ大地の知恵—（主催：GSJ・日本地質学会・岩手県立博物館）、2023年3月10日（金）～12日（日）、参加者792名
- ・市民講演会、3月11日（土）、講師：越谷信会員（岩手大学）、参加者約40名

5. Web教材『ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう』の利用実績

- ・教材URLへのアクセス数（2022年度）：44,221件

6. 地質学者に答えてもらおう（2012年3月～運用開始）

2022年度内の質問数38件、これまでの質問の主なものとその答えは学会HPにて公開中。

4) 出版物の刊行

<地質学雑誌>

- ・128巻1号～129巻1号を刊行した。2022年4月～2023年3月末までの総ページ数は756ページ。

<日本地質学会ニュース>

- ・25巻4号（2022年4月）～26巻3号（2023年3月）を発行した。総ページ数は340ページ。

<Island Arc>

- ・Island Arc 編集委員会の編集により、Wiley社よりVol.31, Issue 1～Vol.32, Issue 1を刊行した。2022年4月～2023年3月末までの総ページ数は502ページ。

<ジオルジュ>

- ・前期号（2022年5月、16ページ）、後期号（同年11月、20ページ）を発行。

<その他>

- ・「地質系若者のためのキャリアビジョン誌2022」2022年12月、フルカラー102p（86社掲載）、2500部発行。配布先：大学および附属研究機関等49件。
- ・「はじめての地質学（ベレ出版発行、日本地質学会監修）」2023年2月増刷（第5刷700部）。

5) 関連外部委員会への協力

下記の関連外部委員会等に対して本学会から選出された委員、継続してそれぞれの活動、関連学会の発展と連携に協力した。

日本地球惑星科学連合：代議員（岡田 誠）、連絡委員（亀高正男）、プログラム委員（上澤真平、松崎賢史）、ダイバーシティ推進委員会（堀 利栄）、環境・災害対応委員会・災害の委員（川畑大作）、環境・災害対応委員会・環境の委員（小荒井 衛）、自然史学会連合（兼子尚知）、土質・地質技術者生涯学習協議会（CPD）（佐々木和彦）、JABEE担当委員（竹内真司）、地球・資源分野JABEE委員（佐々木和彦、金川久一、坂口有人、細矢卓志、亀高正男）、地質の日事業推進委員会（委員長：平田大二）、日本ジオパーク学術支援連合（JGASU）：委員・代表（天野一男）、（NPO）地学オリンピック日本委員会広報小委員会（坂口有人）、地震火山地質子どもサマースクール運営委員（柴田伊廣）、防災学術連携体連携委員（中澤努（常務理事）、松田達生（地質災害委員長））など。

6) その他報告事項（主に他学協会との共催・後援、協賛行事など、開催時期に関わらず2022年度内において承認したもの）※そ

のほかはNews誌、HPに掲載の執行理事会議事録、理事会議事録参照。

<他学協会などからの依頼>

- ・新潟大学旭町学術資料展示館企画展「ジオパークの大放散虫展」（7/20-8/28、あさひまち展示館）の後援。
- ・日本地球化学会第69回年会（9/5-12、高知大学でのハイブリッド大会）の共催。
- ・神奈川県立生命の星博物館特別展「みどころ沢山！かながわの大地」（7/16～11/6）の後援。
- ・第38回ゼオライト研究発表会（12/1-2、あわぎんホール（徳島県））の協賛。
- ・こどものためのジオ・カーニバル企画委員会「第22回こどものためのジオ・カーニバル」（11/5-6、大阪市立自然史博物館）の後援。
- ・NPO日本地質汚染審査機構「第5回水循環シンポジウム」（10/22、茨城県潮来ホテル）の後援。
- ・第60回アイソトープ・放射線研究発表会（2023/7/5-7、日本科学未来館）の後援。
- ・社会地質学会「第32回環境地質学シンポジウム」（11/25-26、日本大学文理学部）の後援。
- ・石油技術協会令和4年度秋季講演会（11/1、東京大学小柴ホール）の協賛。
- ・三浦半島活断層調査会観察会「宅地開発で隠れた衣笠断層帯を歩く」（2023/3/18）の後援。
- ・日本学術会議「原子力総合シンポジウム2022」（2023/1/26、学術会議講堂）の後援。
- ・Techno-Ocean 2023（2023/10/5～10/7、神戸国際展示場）の協賛。
- ・筑波大学朝永振一郎記念第18回「科学の芽」賞の後援（作品募集期間：2023/8/21～9/16）。
- ・科学教育研究協議会「第69回全国研究大会・埼玉大会」（2023/8/4-6、埼玉県立与野高等学校）の後援。
- ・藤原ナチュラリストストーリー振興財団九州シンポジウム「天変地異の時代～火山列島に生きる～」（2023/10/15、アクロス福岡）の後援。
- ・蒲郡生命の海科学館「第13回惑星地球フォトコンテスト入選作品展」（2023/1/28-4/9）の共催。
- ・三浦半島活断層調査会観察会「地質の日記念行事観音崎の地層と関東大震災の傷跡をたどる」（2023/6/4）の後援。
- ・日本科学技術振興財団「青少年のための科学の祭典2023」（2023/6/10-24/1/21；全国44会場）の後援。
- ・NPO法人地学オリンピック日本委員会「東アジアの高校生のための地学フェスティバル」（2023/8/31-9/3、福岡県宗像市グロウバルアリーナ）の後援。
- ・日本学術会議公開シンポジウム「有人潜水調査船の未来を語る」（2023/6/17、日本学術会議講堂）の後援。

- ・日本地球化学会第70回年会（2023/9/21-23, 東京海洋大学, 一部ハイブリッド）の開催。
 - ・山陰海岸ジオパーク「世界の地質遺産100選認定記念事業」（2023/5/14, 兵庫県豊岡市）の後援
- ＜他学協会などへ依頼＞
- ・第6回ショートコースについて、日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC）へ後援を依頼し承諾された。
 - ・第14回惑星地球フォトコンテストについて、後援および協賛を依頼し承諾された。（ ）は後援および協賛金。
 - ・後援：日本ジオパークネットワーク（3万円）、深田研ジオ鉄普及委員会（1万円）
 - ・協賛：株式会社ウィンディーネットワーク（5万円）
 - ・第130年学術大会（京都大会）の2つのトピックセッションについて、共催および後援を依頼し承諾された。
 - ・「T03. 大地と人間活動を楽しみながら学ぶジオパーク」：日本ジオパークネットワークとの共催。日本ジオパーク学術支援連合の後援。
 - ・「T06. 堆積地質学の最新研究」：日本堆積学会、石油技術協会探鉱技術委員会と日本有機地球化学会との共催。
 - ・「街中ジオ散歩 in Yokohama」（2023/5/14, 日本応用地質学会との共催行事）について、神奈川県立生命の星・地球博物館へ共催を依頼し承諾された。

7) 支部の活動

＜北海道支部＞

1. 支部例会・総会：12/27（火）オンライン開催。例会は開催なし。
 2. 幹事会：3/26（土）オンライン開催、ほかメール会議。
 3. 行事
- 1) 「地質の日」記念展示：開催なし。
 - 2) 北海道地質百選検討グループ
 - ・グループ構成員：石井正之、垣原康之、重野聖之、田近 淳、中川 充、宮坂省吾
 - ・ウェブサイト運用：北海道地質百選をウェブサイトで公開している。PC故障につき更新停滞中。
 - ・「北海道自然探検 ジオサイト107の旅」出版および印税収入：2021年度売り上げ52冊（出版以来の総売り上げ1,822冊）。
 - 3) 巡検関係：開催なし
 - 4) ジオパーク関係：学術支援連合の会合への参加等のジオパーク支援に関する活動を実施した。
 4. 役員交代：支部長が山本正伸会員から沢田健会員へ変更となった。庶務幹事がMarie Python会員から中村英人会員へ変更。

＜東北支部＞

1. オンライン（zoom）による支部総会（2023/3/30（木））、Zoom形式にて開催。出席者14名、委任状16名。①2022年度の会計報告。②地方支部区選出代議員／理事の定数ア

ンケートについて報告。③2023年度活動案。④2023年度の支部総会について。⑤2024年山形大会について。

＜関東支部＞

1. 幹事会（すべてオンラインで月1回程度の間隔で開催）
 - 5/10, 6/15, 7/5, 8/4, 24, 9/14, 10/18, 11/29, 12/20, 2023/1/27, 2/20, 3/13, 4/9
 2. 行事
- ①巡検関係
- ・アウトリーチ巡検「相模原市の相模野台地の地形・地質観察」, 2023/2/19（日）、参加費1,000円、参加26名、講師：河尻清和会員（相模原市立博物館）。
- ②フィールドキャンプ[開催中止]※2022年度も代替行事として、布良海岸でのフィールド教育巡検を実施。
- ・学生・初級者向け「地質断面図」の書き方講座—布良海岸巡検—
 - 6/4（土）館山市布良海岸野外地質調査, 6/5（日）地質断面図の作成作業（TSUBAKI船橋、多目的スペース）、参加費学生6,000円、一般10,000円、参加者6人。
- ③シンポジウムなど
- ・県の石講演会「茨城県の石」, 2023/1/22（日）13:00-16:05, オンライン開催、参加費無料、事前申込制、参加93名、講師：小池 渉会員（ミュージアムパーク茨城県自然博物館）、国府田良樹氏（神栖市歴史民俗資料館）、富永紘平会員（筑波山地域ジオパーク推進協議会）
 - ・総会講演会, 2022/4/17（日）14:00-15:30, 大田区産業プラザPiO特別会議室、協力：関東地質調査業協会、ハイブリッド実施、参加費無料、事前申込制、参加者：会場9人、オンライン83人（合計92人）、講師：中澤 努会員（産総研）「首都圏の浅部地盤の地質層序と地盤震動特性」
- ④総会, 2022/4/17（日）15:45-16:30, 大田区産業プラザPiO特別会議室、ハイブリッドにて実施
3. 支部顕彰：支部功労賞3件。次の団体・個人に授与した。
 - 佐野市葛生化石館、田村糸子会員、講座 犬塚則久先生の骨ゼミ。
 4. 早稲田大会関係：徳永康重展（14号館ロビー）、市民講演会（東京の自然災害と防災, 15号館103教室）、SIシンポジウム（関東の地質：露頭から大深度まで, 14号館102教室）、家族巡検（生命の進化を楽しく学ぼう, 上野動物園と国立科学博物館）、大会巡検各コース（A～I, 9コース）の企画運営に携わった。

＜中部支部＞

1. 2022年中部支部年会は金沢大学での対面及びZoomによるオンラインでのハイブリッドで開催した。以下のイベントを開催。
 - ・中部支部総会（出席6名、議決権行使書提出者13名、委任状提出者19名）
- 議案：①2021年度活動報告、②支部規約及び運営細則改正、③次年度開催県の決定
- ・支部幹事会（出席者9名）、コロナ禍での今

後の開催方針などを検討した。

- ・特別講演「海洋掘削科学：日本海」、特別討論会「珠洲の群発地震」
- ・個人講演（ポスター発表3件）
- ・巡検[開催中止]※白山手取川ジオパーク巡検は申込者が定員に達せずキャンセル。

＜近畿支部＞

1. 地球科学講演会「北アルプス生成の謎—マグマと短縮テクトニクスが作り出した北アルプス—」, 5/8（日）、大阪市立自然史博物館ホール・ハイブリッド開催、会場聴講80名、オンライン聴講129名、見逃し配信を含めた視聴回数：652回（5/31まで実施）。講師：原山 智会員（信州大学名誉教授）、共催 大阪市立自然史博物館・地学団体研究会大阪支部。

＜四国支部＞

1. 2022年度日本地質学会四国支部講演会・総会, 12/3（土）、会場：高知大学朝倉キャンパス共通教育2号館

【特別講演】1件。講師：臼井 朗会員（高知大学特任教授）

【一般講演】口頭：8件、ポスター：16件。学生発表賞：計6件、優秀講演賞（口頭発表）2件、優秀ポスター賞4件、CPD単位発行：0人（0単位）

【支部総会】総会参加者（四国の地質学会員）：約13名。①2022年度決算、②2023年度予算が承認された。

＜西日本支部＞

1. 安佐北区役所魅力発見プロジェクト（後援）、「広島市安佐北区白木町で発見された始良Tn火山灰層現地見学会」4/10（日）、5/1（日）、講師：早坂康隆会員（広島大学）、山崎博史会員（元広島大学）、参加者約120名（4/10：約40名、5/1：約80名）。
2. 熊本「地質の日」（共催）、令和4年度第1回サイエンスカフェ「阿蘇・熊本の地質を知ろう！」, 5/22（日）、旧立野小学校体育館、校庭ほか、参加者約100名。
3. 山口大学理学部サイエンスワールド2022（後援）、11/13（日）、会場：山口大学、25の企画、参加者176名。
4. 西日本支部2021年度総会・第173回例会, 2023/3/4（土）、会場：島根大学、共催：島根大学。

- ・総会：出席者36名 委任状：18通、議案：①2022年度事業総括、②2022年度決算報告、③2023年度事業計画、④2023年度予算（案）、⑤2023年度役員
- ・例会：参加者45名、口頭発表：17件、ポスター発表13件。

2. 執行理事会および理事会議決・承認事項

- 1) 理事会議長・副議長の選出
 - 議長：芦 寿一郎、副議長：小松原純子
- 2) 会長＝代表理事・副会長の選出
 - 会長＝代表理事：岡田 誠、副会長：杉田律子・星 博幸
- 3) 執行理事の選出、部会長の選出（※筆頭者が部会長）、原案通り選出された。

・常務理事：中澤 努，副常務理事：緒方信一
・運営財政部会：亀高正男・加藤猛士
・学術研究部会：辻森 樹（国際）・尾上哲治（研究）・高嶋礼詩（行事）・山口飛鳥（行事）
・広報部会：内尾優子（HP/SNS）・松田達生（News誌）
・編集出版部会：狩野彰宏（IAR）・小宮剛（地質雑）
・社会貢献部会：坂口有人（地学教育，技術者教育）・矢部 淳（生涯教育）・内野隆之（地質災害）
4) 地学オリンピック日本委員会より，第15回オリンピック予選・本選の出題委員に会員1名を推薦。
5) ショートコースの今後の企画について検討するため，運営チームメンバーを選出した。
（メンバー：山口飛鳥，矢部 淳，亀高正男，辻森 樹，北村有迅，納谷友規則）
6) 新型コロナウイルス感染拡大防止に関する学会の対応について，社会状況を注視しながら随時情報を発信（12/22，2023/3/13更新）。→学会HP：お知らせを参照。
7) 学術大会におけるコロナ対応について，早稲田大会は対面での開催を目指す。感染等で来場できず，多数の講演キャンセルが出ることを考慮し，zoomによるリモート発表を認めることとした。
8) 2023年度の各賞選考委員会委員長は委員間の互選により山路 敦理事を選出した。
9) 各種委員会メンバーの承認。→委員会一覧は学会HPを参照。
10) 今期の会長代行順位の第一位は星 博幸副会長とする。
11) 学会公式の広報メディア（ニュース誌，ホームページ，メルマガ，SNS）の適切かつ有益な運用のため，広報メディア運用規則を定め，これを承認。
12) ジオパーク支援委員会より，市民対象オンラインシンポジウム「ジオパーク地域に伝わる伝承と地質学：古代からの自然観を今に活かす」の開催の提案があり，承認した。
13) 地質学雑誌編集委員会より提案の論文投稿促進策を承認。①学会各賞受賞者による地質学雑誌またはIsland Arcへの学術的セルフレビューの投稿。②学術大会発表の中から編集委員会の推薦を受けた発表に「レター」を投稿してもらうことを促す。編集委員会として奨励していく。
14) 地質情報展の今後の方向性について（開催地が2巡目となる場合）：産総研より，学術大会との併催を続けると開催地が2巡目となることも多く，地質情報展の開催地が限定されてしまうため，2巡目となる場合は，学術大会開催地とは別の未開催地域での開催希望の提案があった。その場合もこれまで通り地質学会との共同主催とし，共同で科研費の申請をすることで活動の継続を承認。
15) 次の委員会委員の選出について承認。

・地学教育委員会メンバー（11名）：坂口有人（委員長），浅野俊雄，阿部国広，大信田彦磨，高嶋礼詩，廣木義久，星 博幸，松永 豪，矢島道子，渡来めぐみ，藤原 靖
・ジェンダー・ダイバーシティ委員会1名追加：武藤 俊
16) 研究奨励金規則を定め，これを承認。
※若手育成事業（竹内圭史会員からの寄付金を元に行う事業）の一つとして，2023年度からの運用のため，奨励金支給者の募集を2023年1月から開始。
17) 地球惑星連合の2023年プログラム委員の推薦：（正）上澤真平／（副）松崎賢史
18) 経済産業省資源エネルギー庁より，総合資源エネルギー調査会臨時委員の推薦依頼があり，会員1名を推薦。
19) 地質技術者教育委員会より提案された「第3回JABEEシンポジウム」の開催について承認した。
20) 2023年度 総会 の 日 程：2023年6月3日（土），オンラインで実施することを承認。
21) 地質学雑誌投稿編集出版規則の変更を承認。→変更点の解説・投稿編集出版規則は学会HPを参照。
22) 名誉会員推薦委員会委員の選出。委員長：星 博幸副会長
・階層別委員（4名）：官公庁：平田大二，小中高教員：小幡喜一，会社：佐々木和彦，大学：高木秀雄
・職責委員（各支部長7名）：山本正伸，長橋良隆，向山 栄，道林克禎，三田村宗樹，近藤康生，山本啓司
・理事会推薦委員（1名）：大友幸子
23) 各種委員会の代表者の変更と委員の追加を承認。
（南極地質研究委員会）委員長交代：小山内康人→大和田正明，委員追加：中野伸彦，足立達朗，加々島慎一，北野一平
（地質技術者教育委員会）委員追加：藤代（阿部）祥子
（行事委員会）委員交代：田村嘉史→新里忠史（環境地質部会），遠藤俊祐→宇野正起（岩石部会），納谷友規→辻野 匠（層序部会・地域地質部会）
24) 研究奨励金選考委員の選出。研究奨励金の募集要項について承認。
委員長：内野隆之，委員：星 博幸，中澤努，亀高正男，磯崎行雄，宮下由香里
25) 若手有志会よりイベントの企画提案があり，承認。学会公式イベントとして開催する。
①学部学生・大学院生向けのオンライン交流会（2023年2月17日（金）開催），講演者：郡山鈴夏会員（糸魚川フォッサマグナミュージアム），小島啓太郎氏（（株）INPEX），青島優生会員（日鉄鉱業（株）），岡 智司氏（農林水産省農林振興局），相田和之会員（株式会社 森山地質年代学研究所）
②若手巡検・研究集会（2023年7月8日（土）～9日（日）実施予定，1泊2日，北海道洞爺

湖有珠山ジオパーク周辺），講師：横山 光会員（北翔大学），世話人：佐々木聡史会員（名古屋大学）
26) 日本応用地質学会より「応用地質（2023年2月発行）」の巻頭言への寄稿依頼があり，岡田誠会長が執筆。
27) 第14回惑星地球フォトコンテストの入選枠について，今回から「大学生／大学院生賞」を新設する。
28) 学術に関わる話題を議論していく「学術戦略ワーキンググループ（WG）」の設置を承認（メンバー：尾上哲治*，黒田潤一郎，小宮 剛*，菅沼悠介，田阪美樹，辻森 樹*，星 博幸*，山口飛鳥*（*印は執理事務））。
29) 各賞選考委員会の下に各賞選考検討委員会を設置し，学会賞，功績賞，都城秋穂賞，H.E.ナウマン賞，棚山雅則賞の諮問をした。委員間の互選により委員長は岡田 誠会長が選ばれた。
（前・現地質学会会長）磯崎行雄（前会長），岡田 誠（現会長，委員長）
（過去の学会賞受賞者7名の委員：執理事務会推薦）Simon Wallis，脇田浩二，木村 学，岩森 光，島海光弘，榎並正樹，山路 敦
・Island Arc賞については，Island Arc編集委員会に選考を諮問した。
30) 文部科学省より，次期（令和6年度開始）「地震火山観測研究計画」に対するアンケート調査について，各専門部会へ議論を依頼し，取りまとめて回答した。
31) 学術会議会員・連携会員の選考対象に関する情報提供依頼に対し，学術戦略WGで検討を行い，地質学会として5名の情報提供を行った。
32) 日本学術会議の「未来の学術振興構想（大型研究の後継）」の策定に向けた「学術の中長期研究戦略」の公募への提案を完了した。「地球惑星研究資料のアーカイブ化とキュレーションシステムの構築」（代表：岡田誠，連絡責任者：小宮 剛）
33) 特集号「球状コンクリーションの科学」（世話人：吉田英一ほか）の冊子体作成については：電子化後の移行期のため世話人に希望を確認し，冊子体を作成することとした。
34) オンデマンド版冊子：129巻についても128巻同様に年間購読を受け付けることとした。
35) 2021年度地質系若手人材動向調査報告をニュース誌12月号に掲載した。
36) ニュース誌連載記事「博物館で地学を学ぼう！」のタイトル変更：ジオパーク関連施設が参加しやすいよう，「博物館・ジオパークで地球を学ぼう！」に変更する。
37) 2023年度山田科学財団研究助成について，2件の推薦を承認。
38) 第14回惑星地球フォトコンテストの審査結果（応募総数359点）：最優秀賞1点，優秀賞2点，ジオパーク賞1点，日本地質学会賞1点，ジオ鉄賞1点，スマホ賞1点，大学生・大学院生賞1点，入選4点，佳作11点を選出。
39) 2023年の「地質の日」に，オンライン一

般講演会の実施（2023/5/13（日））を決定。
講演：四国西予ジオミュージアム、銚子ジオパークミュージアム、糸魚川フォッサマグナミュージアム。
40) 街中ジオ散歩を2023/5/14（日）に開催することとした（横浜市内（京急東神奈川～JR桜木町））。
41) 大学入試センターに対し「令和5年度大学入試共通テストの地学関連科目に関する意見書（2023/3/10付）」を提出。
42) 地質技術者教育委員会および地球・資源分野JABEE委員会の委員交代：金川久一委員の退任、後任として亀尾浩司委員が着任する（任期は金川委員の残任期間まで、地球・資源分野JABEE委員会（2024年3月まで）、地質技術者教育委員会（2024年5月まで））。
43) 行事委員の交代：（火山部会選出委員）上澤真平→石毛康介へ交代。
44) 防災学術連携体より「関東大地震100年」関連行事の有無について調査依頼があり、回答した（第22回地震火山地質こどもサマースクール in 平塚）。
45) 関東大地震から100年の関連行事として、関東支部を中心に巡検とオンライン講演会を開催する。
・巡検：震生湖（関東大震災による堰止湖）日帰り巡検。（案内者）千木良雅弘（深田研）、鈴木毅彦（都立大）、笠間友博（関東支部）を予定。
・オンライン講演会：（会期）2023年9月30日（土）、（講師）石渡明会員（元地質学会会長）、井上公夫氏（砂防フロンティア整備推進機構）。
46) ポスター賞の廃止（発展的解消）と「学生優秀発表賞」の新設、運営規則の変更を承認。授賞対象は学籍を有する学生会員のみ、学籍の無い学生会員や研究生は対象外。口頭発表、ポスター発表問わずエントリーした発表を対象とする。
47) 次の77名の会員を永年会員として顕彰することとした。
70年顕彰者：2名（1952年度入会者：2022年度会費まで納入済）加藤 昭・久保誠二
60年顕彰者：5名（1962年度入会者：2022年度会費まで納入済）福富幹男・宮沢忠治・原田正史・菅野重也・大口健志
50年顕彰者：12名（1972年度入会者：2022年度会費まで納入済）※1973年1～3月入会者のみ。※1972年1～12月入会者は2022年顕彰済。
小林哲夫・佐々木哲・柴 正博・鈴木清一・高橋正樹・但馬達雄・錦織英機・増田俊明・矢島道子・矢野孝雄・山口廣文・吉野博厚
40年顕彰者：58名（1982年度入会者：2022年度会費まで納入済）相田 優・油井 裕・荒川竜一・飯島 力・石井秀明・伊與田紀夫・内田 克・大石 徹・大野裕記・大箸義人・大和田正明・岡田浩明・兼子尚知・北川明照・栗原秀平・郷家正志・越谷 信・榊原孝雄・佐々木理・佐々木浩・佐藤尚弘・重田寿夫・篠原 暁・柴崎俊明・柴田 尚・清水公二・清水秀登・末武晋一・杉山和稔・鈴木桂

子・鈴木英雄・角井朝昭・隅田まり・仙石昭栄・曾野哲人・多賀 優・高木哲一・高見智之・田野崎隆雄・千葉茂樹・辻 喜弘・寺戸真・戸栗和広・飛田健二・中村康雄・野口一郎・野 誠二・野田芳和・久国浩之・堀内誠示・松岡敬二・松田博貴・峯崎智成・山路敦・百合野俊彦・横山義人・吉田英一・渡辺真司
48) 若手有志会を学会の正式組織とし、若手活動運営委員会の設立を承認。
49) 2022年度の支部活動報告（p.8-10に掲載）を承認。
50) 2022年度事業実績報告・決算案を承認した。
51) 2023年度事業計画および2023年度予算案を承認した。
52) 名誉会員推薦委員会から候補者として提案された、嶋本利彦会員、宮下純夫会員を総会に推薦することとした。
53) 選挙規則の変更を承認した。
代議員、理事のダイバーシティ確保および電子投票への対応を主な目的とし、選挙規則類を変更する。所属区分別定数（旧所属別最低充足数）に加え、新たに40歳未満の正会員及び性別の属性別定数を設け、それら理事の一定数確保を目指す。
54) 代議員および役員選挙について、電子投票に対応するため、クラウド版会員管理システムを構築したウェッジソフトウェア社へ選挙システムのカスタマイズを依頼した。
55) 各賞選考委員会より提案された下記の各賞授賞者を承認した。
・日本地質学会賞（1件）
道林克禎（名古屋大学大学院環境学研究所）
対象研究テーマ：地殻とマントルのレオロジーと構造地質学的研究
・日本地質学会功績賞（2件）
小山内康人（元九州大学）
対象研究テーマ：高度変成岩類を用いた造山運動と大陸の成長・進化における研究の推進
佐藤比呂志（東京大学地震研究所）
対象研究テーマ：反射法地震探査を軸とした日本のサイモテクトニクス研究の推進
・Island Arc Award（1件）
授 賞 論 文：Yoshihiko Tamura, Osamu Ishizuka, Tomoki Sato, Alexander R. L. Nichols, 2019, Nishinoshima volcano in the Ogasawara Arc: New continent from the ocean? Island Arc, 28, e12285.
・日本地質学会小澤儀明賞（1件）
沢田 輝（海洋研究開発機構）
対象研究テーマ：太古代・原生代における地殻消長メカニズム変遷の地質記録断片からの解説
・日本地質学会棚山雅則賞（1件）
大柳良介（国士舘大学理工学部）
対象研究テーマ：プレート境界領域における岩石-水相互作用と反応輸送過程の実態解明
・日本地質学会論文賞（4件）
対象論文：入月俊明・柳沢幸夫・木村萌人・加藤啓介・星 博幸・林 広樹・藤原祐希・赤

井一行, 2021, 近畿地方の瀬戸内区に分布する下-中部中新統の生層序と対比.
地質学雑誌, 127 (7), 415-429.
対象論文：内野隆之・羽地俊樹, 2021, 北上山地中西部の中古生代付加体を貫く白亜紀岩脈群の岩相・年代と貫入応力解析から得られた引張場. 地質学雑誌, 127 (11), 651-666.
対 象 論 文：Noda, A., Sato, D., 2018. Submarine slope-fan sedimentation in an ancient forearc related to contemporaneous magmatism: The Upper Cretaceous Izumi Group, southwestern Japan. Island Arc, 27, e12240.
対象論文：Yoshida, K., Tamura, Y., Sato, T., Hanyuy, T., Usui, Y., Chang, Q., Ono, S., 2022. Variety of the drift pumice clasts from the 2021 Fukutoku-Oka-no-Ba eruption, Japan. Island Arc, 31, e12441.
・日本地質学会研究奨励賞（4件）
原田浩伸（東北大学大学院理学研究科）
対 象 論 文：Harada, H., Tsujimori, T., Kunugiza, K., Yamashita, K., Aoki, S., Aoki, K., Takayanagi, H., Iryu, Y., 2021, The $\delta^{13}\text{C}$ - $\delta^{18}\text{O}$ variations in marble in the Hida Belt, Japan. Island Arc, 30, e12389.
佐久間杏樹（東京大学大学院理学系研究科）
対象論文：Sakuma, A., Kano, A., Kakizaki, Y., Tada, R., and Zheng, H., 2021, Upper Eocene travertine-lacustrine carbonate in the Jianchuan basin, southeastern Tibetan Plateau: Reappraisal of its origin and implication for the monsoon climate. Island Arc, 30, e12416.
鈴木康太（京都大学大学院理学研究科）
対 象 論 文：Suzuki, K., Kawakami, T., Sueoka, S., Yamazaki, A., Kagami, S., Yokoyama, T., Tagami, T., 2022, Solidification pressures and ages recorded in mafic microgranular enclaves and their host granite: An example of the world's youngest Kurobegawa granite. Island Arc, 32, e12462.
山岡 健（産業技術総合研究所）
対象論文：Yamaoka, K., Wallis, S. R., 2022, Recognition of broad thermal anomaly around the median tectonic line in central Kii peninsula, southwest Japan: Possible heat sources. Island Arc, 31, e12440.
・日本地質学会フィールドワーク賞（2件）
江島圭祐（山口大学大学院創成科学研究科）
対 象 論 文：Eshima, K., 2021, Anatomy of Shaku-dake high-Mg diorite, southwest Japan: Lithofacies variations and growth process of high-Mg diorite stock. Journal of Mineralogical and Petrological Sciences, 116, 83-95.
羽地俊樹（産業技術総合研究所）
対 象 論 文：Haji, T. and Yamaji, A., 2020,

Termination of intra-arc rifting at ca 16 Ma in the Southwest Japan arc: The tectonostratigraphy of the Hokutan Group. Island Arc, 29, e12366.

※都城秋穂賞, H.E. ナウマン賞, 小藤文次郎賞, 地質学雑誌特別賞, 学会表彰はいずれも該当なし.

56) 6月3日開催予定の総会議案の承認.

57) 研究奨励金選考委員会より, 2023年度研究奨励金支給対象者の報告があり承認. 次の5名の会員に決定した.

柴田翔平 (茨城大学), 遠藤悠一 (筑波大学), 江島圭祐 (山口大学), 志関弘平 (東北大学),

杉浦 慶 (東北大学)

58) 若手育成事業として, 「学生会員」のうち大学生・大学院生を対象とし, 学術大会等で実施される巡検参加費用の補助を承認.

1. 補助は学術大会の巡検代 (設定金額) の半額とする. 巡検代については, 宿泊代・施設利用料等の経費は含めるが, 昼食代および現地までの交通費は原則参加者の全額負担とする.

2. 本補助は支部等の巡検にも適用できる. その場合, 募集前に執行理事会へ申請し, 許可を得ることとする.

59) 北海道支部より「神居古潭巡検」(2023年8月18日 (金) -19日 (土) 開催予定) について, 学生参加費補助の申請があり, これを承認. 若手育成事業として, 学生会員 (大学生・大学院生) の参加費補助を適用する.

60) 韓国釜山で開催予定のIGC2024についての学会対応. ①サポートレターの撤回 (9/16付, 大韓地質学会LOCへの通知), ②撤回の経緯を明記しIUGSと文書で共有, ③10月25日に期限切れとなったMOUの再締結を見送り, ④会員に対して会長メッセージの発出. →経緯説明などの詳細は 学会HPを参照.

61) 2024年以降の学術大会開催地は次の通り.

2024年 東北支部, (会期) 2024年9月8日 (日) ~10 (火), (会場) 山形大学, 実行委員長: 伴 雅雄, 事務局長: 本山 功

2025年 西日本支部: 熊本大学, 会期等の詳細は未定.

62) クラウド版会員管理システムの導入について: 事務局にて動作確認した後, 執行理事会・総務委員会内でテスト操作を実施. いくつかの修正を経て, 会員へ公開・運用を開始.

63) 全地連創立60周年記念誌への寄稿依頼があり, 岡田誠会長が執筆.

64) 防災学術連携体より, 関東大震災100年企画冊子への寄稿依頼があり中澤努常務理事が執筆.

65) 令和6年春の科学技術に関する褒章受賞候補者の推薦について, 1件を推薦.

66) 巡検案内書の投稿締切を11月末 (3ヶ月前倒し) とする. 山形大会の案内書は査読付き論文として現行通りの発行スタイルとする.

67) 今後の巡検案内書のあり方を検討するた

め, ワーキンググループの立ち上げを承認. グループリーダーは杉田律子副会長とする.

68) 2022年度内にご寄付いただいた方々は次の通り (50音順, 敬称略). 謹んで篤志を受けることとした. 磯崎行雄, 小泉明裕 (故人)

2023年度事業計画骨子

地球惑星科学系の中では国内最大規模を誇る学会として, 地質学および関連学問分野の進化・発展に寄与するという本会の責務を全うするためには, 豊かなダイバーシティのもと学術活動を進めると同時に, 健全な経営を行う必要がある. このため以下に示す事業を実施する.

(1. 学術大会)

学会活動の中核をなす学術大会は会員の研究成果発表と情報交換の場であるとともに学問の発展に寄与する場である. 2023年度は第130年学術大会を京都大学を会場として9月17日 (日) ~19日 (火) に開催する. 現地開催を目指す, 新型コロナウイルス感染症の発生状況を考慮し, オンライン開催も想定しておく.

(2. 学術研究活動)

日本発の研究を世界に発信するとともに, 地域に根ざした支部との連携強化を図る. また, 学術大会における研究発表のみならず, 2020年度に開始したショートコースの定着・整備を進め, 会員がさまざまな分野の基礎知識や最新知見を学べる場を提供する. これらの活動を通じて会員の満足度を上げ, 会員定着率の向上を図る. さらに, 本会が主体となって国内外の関連学術団体との連携を取りつつ, 大型研究等の立案・推進に努め, 地質学の継続的発展を目指す.

(3. 出版活動)

地質学雑誌およびIsland Arc誌における優れた論文の確保と安定した出版を目指し, 専門部会等と協力して投稿数の増加に努める. 特に各分野からの総説論文を増やし, 学術誌としての存在感と注目度を高めるように努力する. その結果としてダウンロード数および被引用数が増加することを期待し, 新規特集号の企画も積極的に推進する. また投稿から掲載までの時間短縮に向け, 断続的努力を行う.

地質学雑誌の出版については, 中期的な出版・財務戦略を踏まえた安定した出版体制を構築する.

公式広報誌「ジオルジュ」については, ジオパークや地学オリンピック, 博物館, スポンサー等との連携と財務構造のさらなる改善を進め, 安定的な発行を維持しつつ, さらに市民への広範な広報に努める.

(4. 地質災害対応)

地質災害の発生に迅速に対応する体制を維持し, 地質学的観点からの緊急調査・研究を推進するとともに, 学会HPや地質災害ポータルからの情報発信に努める.

専門部会・支部, ならびに防災学術連携体等における学会活動を通じて, 災害に関する地質学的知識や情報を社会へ提供・発信する. また, 地域の地形・地質特性や自然条件に根ざした地質災害の理解と防災・減災についての普及・啓発に努める.

(5. 広報・普及活動)

社会における本学会の認知度向上と新規会員獲得に資するよう, 学会公式サイト (HP) の刷新を図り, 必要な情報を探しやすく, 分かりやすい形で発信できるようにするとともに, 学会公式Twitter等を活用して社会への速報性を高める. これらの媒体を利用して, 学術大会やショートコース, 講演会, 各種出版物, ウェブ教材, フォトコンテストなどの各種学会サービスについて, これまで以上に効果的・効率的に情報発信を行う. また地質情報展や「地質の日」事業の共催・支援を通じて, 市民・地域レベルの啓蒙活動を推進し, 「県の石」の普及を継続的にすすめる.

(6. 社会貢献)

国際層序委員会の国際年代層序表日本語版を随時更新するとともに, JISを含めた地質標準の普及を図る. 産・官・学の連携を進め, プレスリリースや学会声明等をタイムリーに発信することにより, 地質学が社会の持続的発展に資することを発信し, 社会的プレゼンスの向上に努める. 地質技術者の継続教育については, 高等教育や地質技術者への支援やサービスを継続し, かつ発展させる. CPD発行によるサービス強化を引き続き図る. ジオパークについては, 日本ジオパーク学術支援連合の活動を通じて学術面からの支援を行う. 日本ジオパークネットワークおよび日本ジオパーク委員会への協力も引き続き行う.

(7. 地学教育)

令和6年度大学入試共通テスト (本試験) の地学関連科目の「地学基礎」「地学」問題を確認し, 改善等が必要であれば意見書として取り纏め, 入試センターに送付するとともに公表する. 次世代地質学者の育成および将来の新規会員獲得に資するよう, 小中高校生を対象とした研究成果の発表の場として, 学術大会においてジュニアセッションを実施する. 地学オリンピック, 地震火山地質こどもサマースクール等への支援を継続して行う.

(8. 国際連携)

学術交流協定を締結している台湾地質学会, モンゴル地質学会, タイ地質学会, ロンドン地質学会を始め, 諸外国の地質系学協会との間において, より実質的な学術活動の連

携を図る。

(9. 会員サービス・学会運営)

新規会員獲得および学会定着率を向上させるため、学生・院生会費の減額など同時に、就職支援、地質技術者の継続的な専門教育（CPD）に連携した地域型講演会・ワークショップ等の従来型事業を継続して実施し、若手研究者・技術者およびその予備軍である学生・院生会員の育成のための新企画やシニア会員の活躍の場等を提供する。また、

地質若手巡検・研究集会とオンライン交流会を開催し、若手会員同士の分野横断的な議論と交流の促進、若手会員層の拡充をはかる。さらに、野外調査をベースとした若手地質研究者の育成事業を通じて、野外地質学の継承・発展を図るとともに、若手会員層の拡充に努める。

学会組織については、各組織の業務内容・責任を明確化させる。併せて、学会活動の運営の基本となる定款・規則類の整理・整備を行う。学会事務局体制については、業務の整

理・統合と効率化を一層進めることによって、事務局業務の安定化をはかる。さらにダイバーシティー確保の観点から、学会運営に携わる委員会等における若手会員と女性会員の増加に努める。若手活動運営委員会を設置し、若手会員による主体的かつ継続的な活動を支援・推進する。

以上

一般社団法人日本地質学会2022年度収支決算
(2022年4月1日～2023年3月31日)

科 目	2022年度予算	2022年度決算	差 異
I 事業活動収入の部			
1. 事業活動収入 1)			
1) 基本財産運用収入	500	510	-10
基本財産利息収入	500	510	-10
2) 特定資産運用収入	500	886	-386
特定資産運用収入	500	886	-386
3) 会費収入 2)	35,550,000	38,382,000	-2,832,000
正会員会費収入	33,200,000	35,867,000	-2,667,000
正会員院生割引会費収入	800,000	960,000	-160,000
正会員学生割引会費収入	50,000	30,000	20,000
費助会員会費収入	1,500,000	1,525,000	-25,000
4) 事業収入	13,960,400	14,523,319	-562,919
①出版事業収入 3)	4,550,000	5,002,410	-452,410
雑誌販売収入	240,000	196,350	43,650
雑誌印刷負担金収入	550,000	921,100	-371,100
別刷収入	200,000	395,160	-195,160
広報誌販売収入	20,000	62,350	-42,350
論集収入	10,000	17,660	-7,660
リーフレット販売収入	250,000	174,660	75,340
バックナンバー等売上収入	0	5,100	-5,100
その他出版物収入	20,000	5,269	14,731
広告料収入	400,000	260,000	140,000
広報誌企画料	660,000	660,000	0
アイランドアーク編集費・関連収入	2,000,000	2,039,102	-39,102
雑収入	200,000	265,659	-65,659
②年会開催事業収入 4)	5,110,000	5,258,595	-148,595
参加登録費収入	4,400,000	4,104,565	295,435
展示収入	700,000	960,120	-260,120
雑収入	10,000	193,910	-183,910
③普及事業収入 5)	2,800,000	3,576,819	-776,819
普及イベント参加費収入	500,000	345,119	154,881
普及資料等販売収入	300,000	321,700	-21,700
雑収入	2,000,000	2,910,000	-910,000
④支部・部会等活動事業収入 6)	760,000	213,055	546,945
イベント参加費収入	640,000	130,500	509,500
資料等販売収入	70,000	0	70,000
負担金収入	40,000	0	40,000
雑収入	10,000	82,555	-72,555
⑤補助金・寄付金等収入 7)	140,000	410,596	-270,596
出版事業に係る補助金・寄付金収入	50,000	258,596	-208,596
年会開催事業に係る補助金・寄付金収入	0	0	0
広報・普及事業に係る補助金・寄付金収入	90,000	90,000	0
その他助成金収入	0	62,000	-62,000
⑥雑収入	200,400	61,844	138,556
受け取り利息	200	283	-83
引当金受取利息	200	129	71
その他の収入	200,000	61,432	138,568

科 目	2022年度予算	2022年度決算	差 異
⑦引当金取崩し収入 8)	400,000	0	400,000
事業準備引当預金取崩し収入	400,000	0	400,000
年会開催引当預金取崩し収入	0	0	0
普及書出版引当預金取崩し収入	0	0	0
研究奨励引当預金取崩し収入	0	0	0
【事業活動収入計】	49,511,400	52,906,715	-3,395,315
【前年度繰越金】	21,805,226	21,805,226	0
【収入合計】	71,316,626	74,711,941	-3,395,315

科 目	2022年度予算	2022年度決算	差 異
II. 事業活動支出の部			
1) 事業費支出 9)	35,450,800	35,987,937	-537,137
①出版事業 10)	20,560,000	23,575,034	-3,015,034
a 給料手当支出	4,880,000	4,349,735	530,265
b 賞与支給支出	1,200,000	1,110,134	89,866
c 退職掛け金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	960,000	887,066	72,934
e 会議費支出	10,000	9,451	549
f 旅費交通費支出	170,000	208,306	-38,306
通信運搬費支出	3,000,000	3,163,772	-163,772
h 消耗什器備品費支出	180,000	165,439	14,561
i OOA機器・システム等保守管理費	892,400	979,639	-87,239
j 消耗品費支出	392,000	292,837	99,163
l 光熱水料費支出	260,000	270,390	-10,390
m 事務所賃料支出	2,488,000	2,487,864	136
地質学雑誌印刷製本費支出	500,000	558,130	-58,130
News誌印刷製本費支出	2,700,000	4,018,169	-1,318,169
k 広報誌ほか印刷製本費支出	1,200,000	861,212	338,788
出版編集費	1,200,000	3,699,424	-2,499,424
諸謝金支出	250,000	249,418	582
n 雑支出	28,000	14,448	13,552
②年会開催事業 11)	8,456,800	7,276,055	1,180,745
a 給料手当支出	1,220,000	1,087,430	132,570
b 賞与支給支出	300,000	277,533	22,467
c 退職掛け金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	240,000	221,763	18,237
臨時雇賃金支出	800,000	332,850	467,150
旅費交通費支出	10,000	21,891	-11,891
通信運搬費支出	300,000	41,742	258,258
機器賃料支出	500,000	257,400	242,600
消耗品費支出	100,000	42,017	57,983
演題登録公開費	2,200,000	1,829,905	370,095
印刷製本費支出	80,000	4,422	75,578
会場設営・設備費支出	1,000,000	1,661,825	-661,825
懇親会実施支出	29,400	0	29,400
保険料支出	15,000	14,490	510
委託費支出	1,000,000	1,082,400	-82,400
雑支出	300,000	184,524	115,476
巡検実施支出	300,000	153,463	146,537

科 目	2022年度予算	2022年度決算	差 異
③普及事業 12)	4,271,000	4,333,771	-62,771
a 給料手当支出	1,220,000	1,087,430	132,570
b 賞与支給支出	300,000	277,533	22,467
c 退職掛け金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	240,000	221,763	18,237
e 会議費支出	2,600	4,725	-2,125
f 旅費交通費支出	20,000	37,020	-17,020
g 通信運搬費支出	538,000	826,074	-288,074
h 消耗什器備品費支出	40,000	36,757	3,243
i OA機器・システム等保守管理費	198,000	217,697	-19,697
j 消耗品費支出	120,000	141,776	-21,776
k 印刷製本費支出	500,000	16,643	483,357
臨時雇賃金支出	100,000	71,000	29,000
普及イベント実施支出	10,000	0	10,000
普及宣伝費	70,000	83,750	-13,750
保険料支出	10,000	2,400	7,600
諸謝金支出	200,000	156,548	43,452
負担金支出	400,000	435,894	-35,894
n 雑支出	80,000	27,647	52,353
④支部・部会等活動事業 13)	1,463,000	441,397	1,021,603
旅費交通費支出	230,000	10,384	219,616
通信運搬費支出	33,000	32,282	718
機器賃借料支出	10,000	6,750	3,250
消耗品費支出	50,000	17,543	32,457
印刷製本費支出	50,000	0	50,000
臨時雇い賃金	200,000	76,800	123,200
会場賃借料支出	130,000	115,221	14,779
イベント実施支出	400,000	119,604	280,396
保険料支出	40,000	6,600	33,400
諸謝金支出	240,000	35,568	204,432
負担金支出	50,000	0	50,000
雑支出	30,000	20,645	9,355
⑤研究奨励事業 14)	400,000	361,680	38,320
賞授与支出	0	0	0
雑支出	400,000	361,680	38,320
⑥特別事業 15)	300,000	0	300,000
国際交流等事業費	200,000	0	200,000
緊急災害調査事業費	100,000	0	100,000
2) 管理費 16)	13,990,600	12,947,896	1,042,704
a 給料手当支出	4,880,000	4,349,757	530,243
b 賞与支給支出	1,200,000	1,110,137	89,863
c 退職掛け金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	960,000	887,086	72,914
e 会議費支出	50,000	33,080	16,920
f 旅費交通費支出	160,000	90,770	69,230
g 通信運搬費支出	550,000	736,802	-186,802
h 消耗什器備品費支出	180,000	165,454	14,546
i OA機器・システム等保守管理費	1,333,000	979,641	353,359
j 消耗品費支出	392,000	292,852	99,148
k 印刷製本費支出	150,000	127,020	22,980
l 光熱水料費支出	260,000	270,395	-10,395
m 事務所賃借料支出	2,488,000	2,487,876	124

科 目	2022年度予算	2022年度決算	差 異
諸謝金支出	396,000	396,000	0
租税公課支出	42,000	12,700	29,300
負担金支出	300,000	274,883	25,117
n 雑支出	400,000	483,843	-83,843
3) 法人税等支出	70,000	70,000	0
4) 引当金繰入支出	0	886	-886
繰入支出	0	886	-886
【事業活動支出計】	49,511,400	49,006,719	504,681
【事業活動収支差額】	0	-3,899,996	3,899,996
次期繰越収支差額	21,805,226	25,705,222	-3,899,996

<注>2022年度決算

- 1) 収入全体は前年度より微減。
- 2) 会費は依然減少傾向。収入には過年度分支払も含まれる。
- 3) 編集出版事業費はやや収入増。オンライン化しても印刷代、掲載超過ページ代等の著者負担金はやや増収。雑誌等の購読はオンライン化のため、リーフレット等の売り上げは収入減。アイランドアークのロイヤリティはわずかに増額。
- 4) 早稲田大会（口頭発表・対面、ポスター発表オンライン）を開催。
- 5) 普及事業は今年度も増収。地質系業界説明会出席参加費、キャリアアビリティ2022年版の収入により収入増。
- 6) 支部・部会活動は低調。収入減。
- 7) 学会会費の出版物による印刷、フォトコン優勝金など。会員からの寄付あり。
- 8) 取組の進捗を予定した各科目の支出が予想より少ないため引当金による補てんは不要とした。
- 9) 学会の主たる事業が開催できず、支出全体も予算より低い。
- 10) ①～③の各事業費の管理費(a～n)は2)管理費支出との系分比例・各事業固有の費用。
- 11) 雑誌は後半から順調にWEB公開。News誌印刷製本費と出版編集費（主に雑誌のオフライン作業費、英文添削料など）が支出増。
- 12) 早稲田大会実施につき、案分比例の管理費(a～n)を除いた各種費用を支出。
- 13) フォトリソグラフィ・送料、IA3E誌印刷製本費・送料、キャリアアビリティ2022送料など支出。広く配布したため支出増。
- 14) 各費の賞金授与は増減。各費・顕彰に関係する支出のみ。
- 15) 振替や送金事業の増減はない。また、災害による出勤費用もなかった。
- 16) 個々の科目には増減はあるが、全体としては支出は低調。
- 17) OA機器・システム等保守管理費は当初予算システムのカスタマイズ費用を予算化したのが着手です。

収 支 計 算 書

[自 2022年 4 月 1 日
至 2023年 3 月 31 日]

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	500	510	△ 10	
特定資産運用収入	500	886	△ 386	
会費収入	35,550,000	38,382,000	△ 2,832,000	
事業収入				
出版事業収入	4,550,000	5,002,410	△ 452,410	
年会開催事業収入	5,110,000	5,258,595	△ 148,595	
普及事業収入	2,800,000	3,576,819	△ 776,819	
支部・部会等活動事業収入	760,000	213,055	546,945	
事業収入計	13,220,000	14,050,879	△ 830,879	
補助金・寄付金等収入	140,000	410,596	△ 270,596	
雑収入	200,400	61,844	138,556	
事業活動収入計	49,111,400	52,906,715	△ 3,795,315	
2. 事業活動支出				
事業費支出				
出版事業費	8,850,000	12,550,125	△ 3,700,125	
年会開催事業費	6,634,400	5,626,929	1,007,471	
普及事業費	1,450,000	1,392,949	57,051	
支部・部会等活動事業費	1,463,000	441,397	1,021,603	
研究奨励事業費	400,000	361,680	38,320	
特別事業費	300,000	0	300,000	
事業管理費 ^(注)	16,353,400	15,614,857	738,543	
事業費支出計	35,450,800	35,987,937	△ 537,137	
管理費支出				
人件費	7,289,600	6,596,580	693,020	
旅費交通費	160,000	90,770	69,230	
事務所賃借料	2,488,000	2,487,876	124	
事務諸費	3,653,000	3,288,827	364,173	
雑費	400,000	483,843	△ 83,843	
法人税等支出	70,000	70,000	0	
管理費支出計	14,060,600	13,017,896	1,042,704	
事業活動支出計	49,511,400	49,005,833	505,567	
事業活動収支差額	△ 400,000	3,900,882	△ 4,300,882	

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
II. 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
事業準備引当預金取崩収入	400,000	0	400,000	
年会開催補助費引当預金取崩収入	0	0	0	
普及書出版引当預金取崩収入	0	0	0	
研究奨励引当預金取崩収入	0	0	0	
投資活動収入計	400,000	0	400,000	
2. 投資活動支出				
退職手当引当預金繰入支出	0	138	△ 138	
年会開催補助費引当預金繰入支出	0	132	△ 132	
普及書出版引当預金繰入支出	0	124	△ 124	
周年記念事業準備引当預金繰入支出	0	41	△ 41	
研究奨励引当預金繰入支出	0	26	△ 26	
若手育成事業引当預金繰入支出	0	425	△ 425	
投資活動支出計	0	886	△ 886	
投資活動収支差額	400,000	△ 886	400,886	
III. 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	0	3,899,996	△ 3,899,996	
前期繰越収支差額	21,805,226	21,805,226	0	
次期繰越収支差額	21,805,226	25,705,222	△ 3,899,996	

(注) 1. 各事業ごとの「事業管理費」を、抜き出して一括して表示している。

計算書類に対する注記 (2022年度)

1. 重要な会計方針

公益法人会計基準を採用している。

1) 引当金の計上について

- ・事業準備引当金：将来的な事業、前年度未完事業、大規模災害調査・研究などのために引当。
- ・年会開催補助費引当金：年会事業収支の余剰金を不足が生じた場合に備え引当。
- ・退職手当引当金：期末要支給額のうち、中退共掛け金を考慮した見込み額を引当。
- * 中退共の掛け金積立額：今期末で6,806,990円(利子含む：2名分)。
- ・普及書出版引当金：地質学会名で出版社から刊行した出版物の著者からの印税寄付金を以後の普及書出版に備え引当。
- ・周年記念事業準備引当金：周年事業のための引当。
- * 125周年記念事業準備引当金(2018年度にて事業終了)の残額を名称変更。
- ・研究奨励引当金：会員の研究奨励のために会員からの寄付金および必要に応じて引当。
- ・若手育成事業引当金：若手野外地質学者の育成事業のための引当。

2) 消費税等の会計処理

税込方式によっている。

2. 基本財産の残高状況は次のとおりである。

(単位円)				
科 目	期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
預 金	30,000,000	0	0	30,000,000
合計(基本財産)	30,000,000	0	0	30,000,000

収支計算書に対する注記 (2022年度)

1. 資金の範囲について

資金の範囲には現金、預金、仮払金、前払金、未払金、預り金、前受金を含める。

期末残高は下記に示すとおりである。

2. 次期繰り越し収支差額の内容は、次のとおりである。

(単位円)		
科 目	前期末残高	当期末残高
現金(切手残高含)	220,246	155,978
預 金	52,692,211	56,005,433
仮払金	381,480	399,155
前払金	1,435,500	276,430
合 計	54,729,437	56,836,996
未払金	2,282,652	1,143,248
預り金	898,559	944,526
前受金	29,743,000	29,044,000
合 計	32,924,211	31,131,774
次期繰越収支差額	21,805,226	25,705,222

科 目		(単位：円)	
I 資産の部		金	額
1. 流動資産			
現金 (現金：120,238円、切手35,740円)		155,978	
三井住友銀行神田駅前支店(普通)1711424		(56,005,433)	
みずほ銀行神田駅前(普通) 2229416		22,364,289	
三菱UFJ銀行神田駅前(普通) 0108667		13,682,461	
ゆうちょ銀行振替口座 00140-8-28067		1,220,907	
ゆうちょ銀行(普通) 62073562		18,008,442	
仮払金(労働保険料2022年度保険料いほか)		729,334	
前払金(事務所賃借更新料)		399,155	
流動資産合計		276,430	56,836,996
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
預金(みずほ銀行神田駅前支店(定期) 6558120-1,2,5,6)		30,000,000	
基本財産合計		30,000,000	
(2) その他の固定資産			
税金・保証金(井桁ビル預け)		2,000,000	
事業準備引当預金(みずほ銀行神田駅前支店(定期) 6558120-9)		(84,636,912)	
退職手当引当預金(三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期) 002315-1,6,7)		7,600,000	
年会開催補助費引当預金(三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期) 002315-2,一部普通)		8,132,790	
普及書出版引当預金(三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期) 002315-3,9,一部普通)		7,719,516	
周年記念事業準備引当預金(三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期) 002315-19)		7,236,727	
研究奨励引当預金(三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期) 002315-8)		2,400,082	
若手育成事業引当預金(三菱UFJ銀行神田駅前支店(定期) 002315-20,21,22,23,24,25,一部普通)		1,547,372	
その他の固定資産合計		50,000,425	
固定資産合計		86,636,912	116,636,912
資産合計			173,473,908
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金			
預り金(社寮料3月分他)		1,143,248	
前受金(2023年4月以降の会費)		944,526	
流動負債合計		29,044,000	31,131,774
2. 固定負債			
引当金			
事業準備引当金		(84,636,912)	
退職手当引当金		7,600,000	
年会開催補助費引当金		8,132,790	
普及書出版引当金		7,719,516	
周年記念事業準備引当金		7,236,727	
研究奨励引当金		2,400,082	
若手育成事業引当金		1,547,372	
固定負債合計		50,000,425	84,636,912
負債合計			115,768,686
正味財産			57,705,222

貸借対照表

2023年3月31日現在

科 目		(単位:円)	
当年度	前年度	増	減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金	155,978	220,246	△ 64,268
預金	56,005,433	52,692,211	3,313,222
仮払金	399,155	381,480	17,675
前払金	276,430	1,435,500	△ 1,159,070
流動資産合計	56,836,996	54,729,437	2,107,559
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
預金	30,000,000	30,000,000	0
基本財産合計	30,000,000	30,000,000	0
(2) その他の固定資産			
敷金・保証金	2,000,000	2,000,000	0
特定資産	84,636,912	84,636,026	886
事業準備引当預金	7,600,000	7,600,000	0
退職手当引当預金	8,132,790	8,132,652	138
年会費補助費引当預金	7,719,516	7,719,384	132
普及書出版引当預金	7,236,727	7,236,603	124
周年記念事業準備引当預金	2,400,082	2,400,041	41
研究奨励引当預金	1,547,372	1,547,346	26
若手育成事業引当預金	50,000,425	50,000,000	425
その他の固定資産合計	86,636,912	86,636,026	886
固定資産合計	116,636,912	116,636,026	886
資産合計	173,473,908	171,365,463	2,108,445
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	1,143,248	2,282,652	△ 1,139,404
預り金	944,526	898,559	45,967
前受金	29,044,000	29,743,000	△ 699,000
流動負債合計	31,131,774	32,924,211	△ 1,792,437
2. 固定負債			
引当金	7,600,000	7,600,000	0
事業準備引当金	8,132,790	8,132,652	138
退職手当引当金	7,719,516	7,719,384	132
年会費補助費引当金	7,236,727	7,236,603	124
普及書出版引当金	2,400,082	2,400,041	41
周年記念事業準備引当金	1,547,372	1,547,346	26
研究奨励引当金	50,000,425	50,000,000	425
若手育成事業引当金	84,636,912	84,636,026	886
固定負債合計	115,768,686	117,560,237	△ 1,791,551
負債合計	0	0	0
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
一般正味財産	57,705,222	53,805,226	3,899,996
正味財産合計	57,705,222	53,805,226	3,899,996
負債及び正味財産合計	173,473,908	171,365,463	2,108,445

正味財産増減計算書

〔 自 2022年 4 月 1 日
至 2023年 3 月 31 日 〕

科 目		(単位:円)	
当年度	前年度	増	減
I. 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用収入	510	510	0
特定資産運用収入	886	461	425
会費収入	38,382,000	38,630,500	△ 248,500
事業収入			
出版事業収入	5,002,410	7,422,130	△ 2,419,720
年会開催事業収入	5,258,595	3,344,000	1,914,595
普及事業収入	3,576,819	3,417,600	159,219
支部・部会等活動事業収入	213,055	133,500	79,555
事業収入計	14,050,879	14,317,230	△ 266,351
補助金・寄付金等収入	410,596	50,640,481	△ 50,229,885
雑収入	61,844	67,703	△ 5,859
経常収益計	52,906,715	103,656,885	△ 50,750,170
(2) 経常費用			
事業費			
出版事業費	12,550,125	16,077,817	△ 3,527,692
年会開催事業費	5,626,929	2,578,088	3,048,841
普及事業費	1,392,949	1,098,923	294,026
支部・部会等活動事業費	441,397	355,950	85,447
研究奨励事業費	361,680	435,960	△ 74,280
事業管理費	15,614,857	14,209,752	1,405,105
事業費計	35,987,937	34,756,490	1,231,447
管理費			
人件費	6,596,580	6,688,088	△ 91,508
旅費交通費	90,770	53,458	37,312
事務所賃借料	2,487,876	2,626,091	△ 138,215
事務諸費	3,288,827	3,125,968	162,859
雑費	483,843	398,606	85,237
法人税等支出	70,000	70,000	0
管理費計	13,017,896	12,962,211	55,685
経常費用計	49,005,833	47,718,701	1,287,132
当期経常増減額	3,900,882	55,938,184	△ 52,037,302

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減	備 考
2. 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
経常外収益計	0	0	0	
(2) 経常外費用				
退職手当引当金繰入額	138	138	0	
年会開催補助費引当金繰入額	132	132	0	
普及書出版引当金繰入額	124	124	0	
周年事業準備引当金繰入額	41	41	0	
研究奨励引当金繰入額	26	26	0	
若手育成事業引当預金繰入額	425	50,000,000	△ 49,999,575	
経常外費用計	886	50,000,461	△ 49,999,575	
当期経常外増減額	△ 886	△ 50,000,461	49,999,575	
当期一般正味財産増減額	3,899,996	5,937,723	△ 2,037,727	
一般正味財産期首残高	53,805,226	47,867,503	5,937,723	
一般正味財産期末残高	57,705,222	53,805,226	3,899,996	
II. 指定正味財産増減の部				
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III. 正味財産期末残高	57,705,222	53,805,226	3,899,996	

監査報告書

一般社団法人日本地質学会
会長 岡田 誠 殿

2023 年 5 月 10 日

監事 山本正司
監事 岩部良子

私たち監事は、2022 年 4 月 1 日から 2023 年 3 月 31 日までの事業年度の理事の職務の執行を監査いたしました。その方法及び結果について次のとおり報告いたします。

1. 監査の方法及びその内容

各監事は、役職員等と意思疎通を図り、情報の収集及び監査の環境の整備に努めるとともに、理事会に出席し、役職員等からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求め、重要な決裁書類を閲覧し、業務及び財産の状況を調査いたしました。以上の方法に基づき、当該事業年度に係る事業報告及びその付属書類について検討いたしました。さらに、会計帳簿及びこれに関する資料の調査を行い、当該事業年度に係る計算書類(貸借対照表及び正味財産増減計算書)及びその付属明細書について精査いたしました。

2. 監査意見

(1) 事業報告等の監査結果

- ① 事業報告及びその付属明細書は、法令及び定款に従い、法人の状況を正しく示しているものと認めます。
- ② 理事の職務の執行に関する不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実はありません。
- ③ 2022 年度は 2 年ぶりに学術大会（早稲田大会）が現地開催され、若手支援のための様々な事業（フィールドワーク賞、研究奨励金等）が開始されたことは評価される。
- ④ 2023 年度は学会活動をさらに活性化させ、豊かなダイバーシティのもと、学会の発展に尽力されたい。

(2) 計算書類及びその付属明細書監査結果

計算書類及びその付属明細書は、法人の財産及び損益の状況をすべての重要な点において適正に示しているものと認めます。

以上

一般社団法人日本地質学会2023年度収支予算案
(2023年4月1日～2024年3月31日)

科 目	2022年度予算	2023年予算案	前年度予算との増減
I 事業活動収入の部			
1 事業活動収入			
1) 基本財産運用収入	500	500	0
基本財産利息収入	500	500	0
2) 特定資産運用収入	500	500	0
特定資産運用収入	500	500	0
3) 会費収入	35,550,000	35,720,000	170,000
正会員会費収入	33,200,000	33,500,000	300,000
学生会費収入(単年度、バック会費当年分)	0	720,000	720,000
正会員院生割引会費収入	800,000	0	-800,000
正会員学生割引会費収入	50,000	0	-50,000
賛助会員会費収入	1,500,000	1,500,000	0
4) 事業収入	13,960,400	23,164,400	9,204,000
①出版事業収入 2)	4,550,000	5,234,000	684,000
雑誌販売収入	240,000	500,000	260,000
雑誌印刷刷損金収入	550,000	920,000	370,000
別刷収入	200,000	369,000	169,000
広報誌販売収入	20,000	50,000	30,000
編集収入	10,000	10,000	0
リーフレット販売収入	250,000	200,000	-50,000
バックナンバー等売上収入	0	5,000	5,000
その他出版物収入	20,000	20,000	0
広告料収入	400,000	300,000	-100,000
広報誌企画料	660,000	660,000	0
アイランドパーク編集費・関連収入	2,000,000	2,000,000	0
雑収入	200,000	200,000	0
②年会開催事業収入 3)	5,110,000	6,480,000	1,370,000
参加登録費収入	4,400,000	4,730,000	330,000
懇親会参加費収入	0	600,000	600,000
展示収入	700,000	950,000	250,000
雑収入	10,000	200,000	190,000
③普及事業収入	2,800,000	3,300,000	500,000
普及イベント参加費収入	500,000	500,000	0
普及資料等販売収入	300,000	300,000	0
雑収入	2,000,000	2,500,000	500,000
④支部・協会等活動事業収入 4)	760,000	1,170,000	410,000
イベント参加費収入	640,000	800,000	160,000
資料等販売収入	70,000	250,000	180,000
負担金収入	40,000	40,000	0
雑収入	10,000	80,000	70,000
⑤若手育成事業収入 5)	0	600,000	600,000
イベント参加費収入	0	600,000	600,000
⑥補助金・寄付金等収入 6)	140,000	140,000	0
出版事業に係る補助金・寄付金収入	50,000	50,000	0
年会開催事業に係る補助金・寄付金収入	0	0	0
広報・普及事業に係る補助金・寄付金収入	90,000	90,000	0
その他助成金収入	0	0	0
⑦雑収入	200,400	200,400	0
受け取り利息	200	200	0
引当金受取利息	200	200	0
その他の収入	200,000	200,000	0

科 目	2022年度予算	2023年予算案	前年度予算との増減
③引当預金取崩し収入 7)	400,000	6,040,000	5,640,000
事業準備引当預金取崩し収入	400,000	2,000,000	1,600,000
年会開催引当預金取崩し収入	0	800,000	800,000
普及書出版引当預金取崩し収入	0	700,000	700,000
研究奨励引当預金取崩し収入	0	700,000	700,000
若手育成事業引当預金取崩し収入	0	1,840,000	1,840,000
【事業活動収入計】	49,511,400	58,885,400	9,374,000
【前年度繰越金】	21,805,226	25,705,222	3,899,996
【収入合計】	71,316,626	84,590,622	13,273,996

科 目	2022年度予算	2023年予算案	前年度予算との増減
II. 事業活動支出の部			
1) 事業費支出 8)	35,450,800	44,553,100	9,102,300
①出版事業 9)	20,560,000	22,941,100	2,381,100
a 給料手当支出	4,880,000	4,000,000	-880,000
b 賞与支給支出	1,200,000	1,176,000	-24,000
c 退職掛け金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	960,000	880,000	-80,000
e 会議費支出	10,000	10,000	0
f 旅費交通費支出	170,000	220,000	50,000
通信運搬費支出	3,000,000	3,000,000	0
h 消耗什器備品費支出	180,000	180,000	0
i OA機器・システム等保守管理費	892,400	144,000	-748,400
j 消耗品費支出	392,000	260,000	-132,000
k 光熱水料費支出	260,000	270,000	10,000
m 事務所賃借料支出	2,488,000	2,626,500	138,500
地質学雑誌印刷製本費支出	500,000	960,000	460,000
News誌印刷製本費支出	2,700,000	4,000,000	1,300,000
k 広報誌ほか印刷製本費支出	1,200,000	1,200,000	0
出版編集費	1,200,000	3,500,000	2,300,000
諸謝金支出	250,000	250,000	0
n 雑支出	28,000	15,000	-13,000
②年会開催事業 10)	8,456,800	11,711,400	3,254,600
a 給料手当支出	1,220,000	1,000,000	-220,000
b 賞与支給支出	300,000	294,000	-6,000
c 退職掛け金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	240,000	220,000	-20,000
臨時雇賃金支出	800,000	800,000	0
旅費交通費支出	10,000	120,000	110,000
通信運搬費支出	300,000	400,000	100,000
機器賃借料支出	500,000	1,010,000	510,000
消耗品費支出	100,000	100,000	0
演題登録公開費	2,200,000	1,900,000	-300,000
印刷製本費支出	80,000	10,000	-70,000
会場賃借料支出	0	1,800,000	1,800,000
会場設営・設備費支出	1,000,000	1,980,000	980,000
懇親会実施支出	29,400	600,000	570,600
保険料支出	15,000	15,000	0
委託費支出	1,000,000	800,000	-200,000
雑支出	300,000	300,000	0
巡検実施支出	300,000	300,000	0

科 目	2022年度予算	2023年予算案	前年度予算との増減
③普及事業 11)	4,271,000	4,960,600	689,600
a 給料手当支出	1,220,000	1,000,000	-220,000
b 賞与支給支出	300,000	294,000	-6,000
c 退職掛け金支出	62,400	62,400	0
d 法定福利費支出	240,000	220,000	-20,000
e 会議費支出	2,600	5,000	2,400
f 旅費交通費支出	20,000	20,000	0
g 通信運搬費支出	538,000	988,000	450,000
h 消耗什器備品費支出	40,000	40,000	0
i OIA機器・システム等保守管理費	198,000	32,000	-166,000
j 消耗品費支出	120,000	137,000	17,000
k 印刷製本費支出	500,000	514,000	14,000
臨時雇賃金支出	100,000	600,000	500,000
会場賃借料支出	10,000	90,000	80,000
普及イベント実施支出	70,000	83,200	13,200
広告宣伝費	160,000	160,000	0
保険料支出	10,000	5,000	-5,000
諸謝金支出	200,000	270,000	70,000
負担金支出	400,000	400,000	0
n 雑支出	80,000	40,000	-40,000
④支部・部会等活動事業 12)	1,463,000	2,000,000	537,000
旅費交通費支出	230,000	300,000	70,000
通信運搬費支出	33,000	50,000	17,000
機器賃借料支出	10,000	20,000	10,000
消耗品費支出	50,000	50,000	0
印刷製本費支出	50,000	50,000	0
臨時雇い賃金	200,000	300,000	100,000
会場賃借料支出	130,000	200,000	70,000
イベント実施支出	400,000	600,000	200,000
保険料支出	40,000	40,000	0
諸謝金支出	240,000	240,000	0
負担金支出	50,000	50,000	0
雑支出	30,000	100,000	70,000
⑤若手育成事業支出 13)	0	1,840,000	1,840,000
旅費交通費支出		220,000	220,000
イベント実施費支出		350,000	350,000
保険料支出		25,000	25,000
諸謝金支出		40,000	40,000
フィードバック賞支出		200,000	200,000
研究奨励金支出		1,000,000	1,000,000
雑支出		5,000	5,000
⑥研究奨励事業 14)	400,000	800,000	400,000
雑支出	400,000	800,000	400,000
⑦特別事業 15)	300,000	300,000	0
国際交流等事業費	200,000	200,000	0
緊急災害調査事業費	100,000	100,000	0
2)管理費 16)	13,990,600	14,262,300	271,700
a 給料手当支出	4,880,000	4,000,000	-880,000
b 賞与支給支出	1,200,000	1,176,000	-24,000
c 退職金掛け金支出	249,600	249,600	0
d 法定福利費支出	960,000	880,000	-80,000
e 会議費支出	50,000	35,000	-15,000
f 旅費交通費支出	160,000	160,000	0

科 目	2022年度予算	2023年予算案	前年度予算との増減
g 通信運搬費支出	550,000	2,020,000	1,470,000
h 消耗什器備品費支出	180,000	180,000	0
i OIA機器・システム等保守管理費	1,333,000	729,000	-604,000
j 消耗品費支出	392,000	300,000	-92,000
k 印刷製本費支出	150,000	270,000	120,000
l 光熱水料費支出	260,000	270,000	10,000
m 事務所賃借料支出	2,488,000	2,626,500	138,500
諸謝金支出	396,000	396,000	0
租税公課支出	42,000	200	-41,800
負担金支出	300,000	320,000	20,000
n 雑支出	400,000	650,000	250,000
3)法人税等支出	70,000	70,000	0
4)引当預金繰入支出 17)	0	0	0
繰入支出	0	0	0
【事業活動支出計】	49,511,400	58,885,400	9,374,000
【事業活動収支差額】	0	0	0
次期繰越収支差額	21,805,226	25,705,222	3,899,996

<注>2023年度予算案
 1) 会員は依然減少傾向、前年よりやや減額、これまでの割引会費収入から、学生会費・単年度または各バング制の会費収入に変わるため、やや減収。
 2) 雑誌等の購読はオンライン印刷注文分のみ、オンライン化後も著者負担金(掲載超過ページ代、改版代)や別刷り注文は収入あり。
 3) 年会は口頭・ポスターとに当面開催を予想、参加者数も京都開催につき増加予想、ほか、企業展示の収入。
 4) 各支部、部会からの予算案を計上。
 5) 若手育成事業費収入は若手の会主催の巡検参加費を計上。
 6) 学会名義による出版物印刷の寄付収入、フोटコン協賛金など。
 7) 目的に応じた引当準備金の取崩しを予定。
 8) ①～③の各事業費の管理費(a～n)は、【2】管理費支出【1】の案分比例・各事業固有の費用。
 9) 地質学雑誌印刷費は、雑誌別刷、オンライン注文分を計上。
 10) 年会支出のうち、案分比例の管理費(a～d)を除き、今期収入収支は相殺予算とし、ない。
 11) 普及事業はショートコースを最低2回開催の予定で計上。科研費が不採択につき、地質情報展と市民講演会の経費も計上。
 12) 各支部、部会からの予算案を計上。
 13) 2023年度からの新事業。
 14) メダルの作成、メダル研削にかかる経費。
 15) 国際交流費による交通学会との往來が再開することも想定し、金のため計上。
 16) 管理費のうち「通信費」はホームページリニューアル費用を増額、「OIA機器・システム等保守管理費」は選挙システムのカスタマイズ費用を計上。

永年（50年）会員顕彰12名 1973年度（1973年1～3月）入会者



小林哲夫



佐々木哲



柴 正博



鈴木清一



但馬達雄



増田俊明



矢島道子

（以下、お写真掲載なし）
高橋正樹・錦織英機・
矢野孝雄・山口廣文・
吉野博厚
※1972年1～12月入会者は
2022年顕彰済。
2023年度会費まで納入済。
（敬称略）

顕彰者からのコメントをご紹介します（順不同）

- ・日本地質学会の発展と会員（とくに学生などの若手会員）の増加を祈念しております。（鈴木清一）
- ・50年は「あっ」という間で、今でも入会当時の学会の熱気のある雰囲気が鮮明に思い出されます。今後も日本地質学会の発展を願っています。（柴 正博）
- ・あれから50年経ってしまったのか（・・・）。（増田俊明）
- ・京都に行くのは久しぶりなので、学会への参加を楽しみにしています。（小林哲夫）
- ・50年にわたり日本地質学会の会員を続けてこれたことを大変光栄に思います。学会の益々のご発展を祈念しております。（佐々木 哲）
- ・早いもので学生時代に加入してから半世紀が過ぎてしまいました。学部学生時代に同級の増田俊明さんや矢島道子さんと日本地質学会の加入申請を行ったときのことをよく覚えています。また、90年代に編集委員長として日本地質学会Newsを立ち上げたこと、第2庶務委員長として水野事務局長と協力して普及教育部門の立ち上げを行ったこと、多くの方々と共に法人化の実現に努力したことなどが記憶に残っています。地質学は、学術界のみならず、自然災害、環境問題、資源エネルギー開発などにおいてもきわめて重要な社会的ツールであり、これらの問題の解決に、地味ではありますが、裏方として大きな役割と責任を果たしています。これからの21世紀において、日本地質学会がこれまで以上に大きく発展され、社会からの期待に応え、重要な社会的役割を担って行かれることを願っております。（高橋正樹）
- ・学生時代から半世紀。地質分野ではプレート理論等、多くのことが実証・解明されてきました。今後の地質学会が会員の増加とともに更なる発展されることを願います。（山口廣文）

日本地質学会 2023年度 名誉会員推薦文

日本地質学会名誉会員推薦委員会
委員長 星 博幸

2023年度名誉会員として2名を推挙いたしました。推薦理由は以下の通りです。



嶋本 利彦 会員

1946年6月26日生（77歳）

京大名誉教授

嶋本利彦会員は1971年に広島大学大学院理学研究科修士課程を修了後、1973年に同大学大学院博士課程を休学してテキサス州立テキサスA&M大学大学院博士課程に入学し1977年に修了した。1977年に広島大学理学部に助手として着任、1986年より助教授、1989年より東京大学地震研究所助教授、1995年より教授、1998年より京都大学大学院理学研究科教授、2007年より広島大学大学院理学研究科教授を務めた。2010年に広島大学を退職後、同年から2017年まで中国地震局地質研究所客員教授、2017年以降は荣誉教授を務めている。この間、1977年にテキサスA&M大学よりPh.D.の学位を取得、2010年に京大名誉教授の称号を授与された。

嶋本会員は断層のレオロジーと地震発生機構の解明を目的とした研究を長年行ってきた。特に、断層のレオロジーと地震時断層の高速すべり摩擦特性に関する研究において世界をリードし、数多くの成果を挙げた。これらの研究成果は、地震発生機構の研究分野に対する地質学からの重要な貢献と認められる。

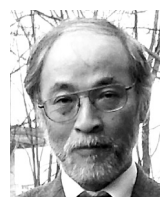
断層のレオロジーに関する研究では、岩塩を模擬物質として用い断層を脆性・中間・完全塑性に三分するモデルを提唱し、中間領域の深さでマイロナイト様の変形構造が発達すること、また地震性の滑り挙動が中間領域にまで及ぶことなどを示した。さらに、これらの成果に基づいて摩擦-流動則を提案し、脆性から完全塑性に至る断層挙動を統一的に記述することを初めて可能にした。断層の高速摩擦に関する研究では、断層のすべり速度が高速になると摩擦発熱などに起因した様々な要因により断層強度が著しく低下することを示し、低速から高速に及ぶ幅広いすべり速度条件について断層の力学的性質の全容を明らかにした。嶋本会員はこれらの研究によって2005年に日本地質学会賞、2015年にEGU Louis Néelメダル、2016年にJpGUフェロー、2019年にAGUフェローを受賞している。またJournal of Structural GeologyやIsland Arcの編集諮問委員を長年務めるなど、学術界の発展に大きく寄与した。

嶋本会員は熱意に溢れた学生指導や共同研究を通じて多くの研究者を育成し、その多くは国内外で活躍している。さらに、試験機設

計のノウハウを後進に伝えるためのセミナーを国内外で数多く開催するなど、嶋本会員が後進育成に果たした功績は大きい。

嶋本会員は1995年から1999年まで、および2004年から2006年まで本学会評議員を務めた。この間に国際交流委員会委員長、各賞問題検討委員会委員長、財政問題検討委員会委員などを歴任した。2002年から2004年までは構造地質研究会会長を務め、現在の本学会構造地質部会の活動への流れの構築に貢献した。

以上のように、嶋本利彦会員の地質学における学術研究、教育、普及、そして本学会の運営への多大な貢献は、本学会の名誉会員として相応しいものと判断し、ここに推薦する。



宮下 純夫 会員

1946年10月20日生（76歳）

新潟大学名誉教授、特定
非営利活動法人北海道総合
地質学研究センター理事
長

宮下純夫会員は1970年に北海道大学理学部地質学鉱物学科を卒業後、1973年に同大学大学院理学研究科修士課程を修了、1979年に同大学大学院博士課程を修了した。日本学術振興会奨励研究員、オルレアン大学招聘研究員を経て、1987年に新潟大学理学部に助手として着任、その後1991年より助教授、1998年より教授を務め、2012年に退職し新潟大学名誉教授の称号を授与された。現在、特定非営利活動法人北海道総合地質学研究センター理事長を務めている。

宮下会員は日高変成帯におけるオフィオライト層の復元を通じて日高変成帯が大陸地殻と海洋地殻の接合によって形成されたことを明らかにし、この地域における島弧-島弧衝突テクトニクスに重要な根拠をもたらした。また、国内のオフィオライト層と付加体に含まれる緑色岩を研究し、日本列島のジュラ紀以降の地質体と海洋プレート運動との関係に重要な視点をもたらした。研究は国内にとどまらず、世界各地のオフィオライトや付加体中の緑色岩を精力的に調査し、それらの地質学的・岩石学的研究を推進した。特に、オマーンオフィオライトの地殻セクションの地質調査に基づき、中央海嶺のマグマプロセスとダイナミクスの解明に多大な成果をもたらした。これらの研究は国内外の学会で発表されるとともに学術雑誌に精力的に投稿され、地質学への顕著な貢献と認められる。これらの研究貢献により宮下会員は1994年および2007年に日本地質学会論文賞を受賞している。

宮下会員は新潟大学において長年にわたり地質学の教育研究に携わり、多くの学生を指導して地質学関連の企業、研究所、大学そして教育機関に送り出した。卒業生は様々な分

2023年度 日本地質学会各賞授賞理由

各賞選考委員会委員長 山路 敦

2023年度各賞の授賞候補者および授賞候補論文について下記の通り報告いたします。

日本地質学会賞 (1件)



受賞者：道林克禎 会員
(名古屋大学大学院環境学研究科)
対象研究テーマ：地殻とマントルのレオロジーと構造地質学的研究

道林克禎会員は、岩石の変形組織の観察と分析により、岩石の強度や地震学的特性に関する研究を展開してこられた。特に、カンラン石に富むマントル岩石に関する研究で優れた成果をあげておられる。海洋リソスフェアを研究する上で、世界的に貴重な陸上岩体の一つであるオマーン・オフィオライトなど、道林会員は世界各地から数多くのマントル岩石試料を採取され、それらの分析により、海洋リソスフェアにおける断層を含む縦方向の剪断帯の発達する向きが、そのリソスフェアの形成後まもない高温の時期につくられた、水平方向の剪断帯のカンラン石の結晶軸選択配向に支配されていることを明らかにされた。この結果は、海洋リソスフェアの強度分布を理解する上で貴重な新知見である。また、道林会員は天然の岩石の結晶軸選択配向の測定・解析に基づいて、リソスフェアにおける地震学的異方性の成因に関する研究成果を挙げてこられた。例えば、オマーン・オフィオライトにおける研究では、一般的に見られるリソスフェアの主要な地震学的異方性が、そのリソスフェアの若い時に獲得されたものであることを示された。これにより、マントルの地震学的な異方性が測定地域の局所的なマントル流動を反映していない可能性があり、この異方性がプレート運動方向と斜行する可能性もあることが明らかになった。

また、道林会員は海洋リソスフェア・マントルの変形構造を体系的に研究するために、日本海洋研究開発機構と連携して、深海の海底などアクセス困難な場所からも岩石試料の採取にも成功しておられる。その研究成果によって、マントルの結晶軸選択配向パターンとそれらに付随する物理的特性の全球的な変化に対する理解が深まった。この研究の一環として、道林会員はカンラン岩の地震学的異方性の程度と特徴を図示できる方法を提案した。この図示法の導入により、岩石試料のP波速度の異方性を定量的に比較することが容易になり、異なるテクトニクス環境におけるリソスフェア・マントルの結晶軸選択配向の分布像を描き出す試みに大きく貢献された。

道林会員は日本地質学会の理事や日本地球

惑星科学連合の副会長などを務めるなど、地球科学分野の学協会運営にも貢献しておられ、また、多くの若手研究者を育ててもおられる。このように道林会員の地球科学分野の発展及び日本地質学会への貢献は大きい。以上のことから、道林会員に日本地質学会賞受賞を授与する。

日本地質学会功績賞 (1/2件)



受賞者：小山内康人 会員
(九州大学大学院比較社会文化研究院)
対象研究テーマ：高度変成岩類を用いた造山運動と大陸の成長・進化における研究の推進

小山内康人会員は、造山帯深部でおこる変成・火成作用の研究を通じて、大陸地殻の進化過程の解明に携わってこられた。そして、その鍵となるいくつかのプロジェクトを立案・推進するとともに、若手研究者の育成などで重要な貢献を果たされた。

小山内会員の研究対象地域は国内外にわたり、そのうち我が国の南極観測事業への参画は1987年以降5回を数え、特に第49次隊では副隊長を務め、また第58次隊でも事業の推進に大きな責務を果たされた。そして、これらの経験を活かして、現在は情報・システム研究機構国立極地研究所運営会議委員や文部科学省南極地域観測統合推進本部委員などとして、極地研究の重要な方針策定に携わっておられる。

南極共同研究の一連の研究により、セル・ロンダーネ山地における大陸衝突境界の存在が明らかになった。さらに、 Gondwana 大陸の中で、かつて南極と繋がっていたスリランカ・インドの超高温変成岩類に関する研究成果とあわせることによって、超高温変成作用進行場のテクトニクスの理解や過去の大陸の復元にとって重要な発見をされている。また、小山内会員が中心となって立ち上げたベトナム・コンツム地塊の調査プロジェクトでは、エクロジャイトや超高温変成岩を報告し、島弧―海溝系から大陸衝突帯への移行過程を理解する上で重要な発見をなされた。そして、モンゴル調査での成果とあわせて、東アジアの形成史を論じておられる。

小山内会員のこれらの研究成果の多くは、多方面の国際共同研究として行われ、本邦と世界各地の研究者ネットワーク形成に多大な貢献をするとともに、多くの研究者育成にも繋がった。さらに同会員が共同執筆しておられる『記載岩石学』と『解析岩石学』は、岩石学を学ぶ上で貴重な教科書であり、教育への貢献も大きい。加えて、地質学会評議員や理事を長く努め、学会運営にも大きく貢献してこられた。以上の理由により、小山内康人会員に日本地質学会功績賞受賞を授与する。

野で活躍しており、教育と後進育成にも寄与した。また、専門である岩石学の研究にとどまらず、2004年10月に発生した新潟県中越地震では新潟大学中越地震調査団の事務局長として奔走するなど多方面で尽力し、社会における地質学的重要性を高めることに貢献した。新潟大学退職後は北海道札幌市において市民講演会で地球環境について講演するなど、地質学の普及と振興に努めている。

宮下会員は長年にわたり本学会の運営と発展に貢献した。2003年から2008年まで本学会理事を務め、この間には地質学雑誌企画部長および地質学雑誌編集委員会副委員長を歴任し地質学雑誌の充実に努めた。2008年からは2期4年間にわたり本学会会長を務めた。会長在任中の2008年12月に本学会は一般社団法人に移行し、その前後において本学会の一般社団法人化に重要な役割を果たした。その後2012年からの2年間も本学会理事を務めた。

以上のように、宮下純夫会員の地質学における学術研究、教育、普及、そして本学会の運営への多大な貢献は、本学会の名誉会員として相応しいものと判断し、ここに推薦する。

日本地質学会功績賞 (2/2件)



受賞者：佐藤比呂志 会員
(東京大学地震研究所)
対象研究テーマ：反射法
地震探査を軸とした日本の
サイスマテクトニクス
研究の推進

佐藤比呂志会員は、広範囲の地質調査にもとづく東北日本の新生代テクトニクスを研究した経験を基盤として、反射法地震探査を軸とした日本のサイスマテクトニクス研究を長年主導し、地表の活断層と深部の震源断層の関係を特定する研究を続けてこられた。この過程で、島弧-海溝系において地殻構造の形成に関与した断層が引き続き震源断層として挙動していることに注目し、サイスマテクトニクス全体像構築における地殻構造研究の重要性を鮮明にした。さらに、東北横断合同地殻構造調査を初めとした海陸統合深部構造探査等の大規模共同研究を遂行する中で、活断層-震源断層システムが日本列島の形成・成長過程の一部としての位置付けを持つものであることを、具体的データによって明らかされた。

佐藤会員らが明らかにしてきた活断層-震源断層システムは、日本のサイスマテクトニクス研究の基盤となる重要な成果であり、現在では地震学、地球物理学、測地学、地形学データとともに内陸地震発生の予測には不可欠なものとなっている。

佐藤会員は、反射法地震探査を軸とした日本のサイスマテクトニクス研究活動の持続・発展のために、1995年兵庫県南部地震以降、大規模な共同研究の企画と実行に長年携わり、国内の学術活動を牽引してこられた。佐藤会員のリーダーシップにより得られた日本の島弧-海溝系構造探査は、先進的成果をまとめた多くの特集号に結実している。その編集にあたっては、研究者育成にも配慮された。

このように佐藤会員が長年主導してこられた日本のサイスマテクトニクス研究は、我が国の地質学界への大きな貢献である。佐藤会員はまた、政府の地震調査研究推進本部が進める活断層評価等にも参画して、研究成果に基づく提案を行うなど、地震防災行政を学術面から支えてこられた。以上の理由により、佐藤会員に日本地質学会功績賞を授与する。

日本地質学会小澤儀明賞 (1件)



受賞者：沢田 輝 会員
(海洋研究開発機構)
対象研究テーマ：太古代・原生代における地殻消長メカニズム変遷の地質記録断片からの解読

沢田輝会員は、ジルコンのU-Pb年代および微量元素組成の測定、そして蓄積された多量のデータの統計処理によって、太古代・原生代における地殻消長メカニズムの変遷などに関して、次のような注目すべき成果を公表してこられた。

およそ20億年より前にできた大陸地殻は大陸地殻全体の20%程度に過ぎず、大陸地殻の形成年代に不均質が認められる。沢田会員は、この要因を理解するために、共同研究者とともに堆積年代の異なる太古代堆積岩中の碎屑性ジルコン年代分布を系統的に比較してその変遷を論じ、約30億年前と20億年前を境に、大陸地殻の形成年代が多様化したことを見いだされた。そして、初期地球では現在の海洋性島弧のような構造場で活発な地殻形成と消失を繰り返していたのに対して、その後は太古代を通じて個々の大陸サイズは次第に増大し、結果として様々な時代に形成された地殻が大陸内部に安定地塊として保存されたとするモデルを提唱しておられる。およそ10億年前からは、大陸地殻の総面積が漸減する。沢田会員はそれを島弧-海溝系で活発に進行している地殻の侵食および地殻物質の沈み込み現象に起因するとの見解を公にしておられる。これらの成果は、母岩の堆積年代の違いを考慮せず、ジルコン年代を一括して扱うことによって提唱されてきた従来の、始原的マントルからの大陸地殻の分化という単純なモデルに基づく考察とは一線を画すものである。また、これらの研究の過程で、アフリカ南部ジンバブエ地塊において現地地質調査を精力的に行い、太古代-原生代における当該地域の地帯構造発達史を詳しく論じておられる。沢田会員は、御荷銓緑色岩類中の火成ジルコンの年代値や微量元素組成に基づき、その原岩についても論じておられ、それは枯渇したマントルに由来する苦鉄質マグマ活動によってジュラ紀後期に形成された海台に由来することを明らかにされた。これは、御荷銓緑色岩類の形成史の議論のみならずジルコン鉱物学の新たな方向性にとっても重要な貢献である。

沢田会員は、このように独自の地質学的視点と微小鉱物の組成分析に基づいて卓越した研究成果を公表してこられた。また、現在では、研究対象を超苦鉄質岩中の希少なジルコンへと拡大し、大陸地殻だけでなく海洋地殻やマントルも含む包括的な固体地球進化の解読に挑んでおられる。今後も活躍が期待できる若手研究者である。以上のことから、沢田会員に小澤儀明賞を授与する。

日本地質学会棚山雅則賞 (1件)



受賞者：大柳良介 会員
(国士館大学理工学部)
対象研究テーマ：プレート境界領域における岩石-水相互作用と反応輸送過程の実態解明

大柳良介会員は、プレート境界の岩石-水相互作用における開放系での反応輸送過程の重要性に着目し、地学現象の時空間尺度を決定する新機軸の研究を展開しておられる。そのため、天然の組織観察と鉱物組成変化、水熱反応実験による組織再現、溶液化学と最新のデータ駆動型解析を取り入れた数値モデリングを融合させて研究を進めてこられた。

プレート境界における物理化学プロセスは、岩石・水反応を伴う水溶液の移動に大きく左右される。石英・カンラン石・水溶液系の物質移動を伴う反応速度を求めるバッチ系実験から、流通系での動的反応実験に成功し、中間生成物や反応溶液の組成から反応の進行メカニズムを大柳会員は明らかにされた。水溶液の移動を含む多相系反応は、詳細反応経路を一意に決める事が困難だが、データ駆動型解析を駆使することで、反応に関与した鉱物と反応速度を精緻に決定し、反応輸送モデルを推定することにも成功しておられる。また、水熱実験と地球化学モデリングを組み合わせた研究からは、蛇紋岩化反応の律速過程が中間生成物の変動で動的に変化し、流体圧が部分的に上昇することを明らかにされた。これらの研究により、岩石-流体反応の時空間発展に支配されるプレート境界の物質変化と力学的挙動の変動などを定量的に明らかにする、データ駆動地球科学ともいえるべき研究領域の開拓が、大柳会員らによって始まったといえる。

同会員はまた、伊豆・小笠原海溝の海亀海山から、しんかい6500により採取された炭酸塩脈を含む蛇紋岩の岩石学および詳細な3次元岩石破砕組織を解析し、水溶液・破砕粒子流体の流動数値モデルを適用することで、炭素を含んだ水溶液の前弧域での、間欠的な水溶液・破砕蛇紋岩の上昇が、秒速0.1~0.01 mという高速で十日から千日の時間尺度で、4年以上にわたり繰り返し起こった事を明らかにされた。この研究は海溝斜面における力学過程に岩石学的な新たな視点から重要な束縛条件を与え、プレート境界での諸過程に新たな視点を提供したことになる。

上記のように、プレート境界領域の物質科学において先進的な成果を挙げ、新規分野を開拓してきた大柳会員は、今後も多様な分野での活躍が期待できる若手研究者である。以上のことから、大柳会員に日本地質学会棚山雅則賞を授与する。

Island Arc Award (1件)



対象論文: Yoshihiko Tamura, Osamu Ishizuka, Tomoki Sato, Alexander R. L. Nichols, 2019, Nishinoshima volcano in the Ogasawara Arc: New continent from the ocean? Island Arc 28, e12285

Nishinoshima, a small island located ~1,000 km south of Tokyo in the active Ogasawara arc, is the subaerial summit of a much larger submarine volcano. The existence of this island has been known since 1702, but its first recorded eruption was in 1973. Following a lull of four decades, it suddenly began erupting again in November 2013 and activity has continued on and off until the present day. Tamura et al. (2019) reported whole rock geochemistry of lavas and scoria dredged from the main submarine volcanic edifice in 2015 and subaerial lava blocks from the 2015 eruption sampled by unmanned helicopter. Both the submarine and subaerial samples are andesitic in composition (58–62 wt% SiO₂), and similar to the andesitic composition of the 1973 eruption products and pre-1973 edifice. The crust underlying Nishinoshima volcano is 21 km thick, without any thinning due to rifting, and thus Nishinoshima is one of the closest arc volcanoes to the mantle on the Earth. Based on the study of these lavas and scorias from Nishinoshima volcano, Yoshi Tamura and others verified the 'Advent of Continents hypothesis' that was proposed by their previous paper. They discovered primitive basalt lavas on knolls surrounding Nishinoshima and olivine-bearing phenocryst-poor andesites from the submarine flanks of the volcano. Their petrological and geochemical studies revealed that andesites erupted in recent history are the result of olivine fractionation from primary andesitic magmas. These primary magmas originate from the partial melting of hydrous mantle rocks, specifically plagioclase peridotites, at relatively low pressures. The thin crust in the Ogasawara Arc region allows for this low-pressure melting.

The study of Nishinoshima volcano enhances our understanding of the volcanic activity and magma evolution in the oceanic arc. Moreover, the authors provide valuable insights into the geological characteristics of Nishinoshima volcano. The implications are: (1) the rate of continental crust accumulation, which is andesitic in composition, would have been greatest soon

after subduction initiated on Earth, when most crust was thin; and (2) most andesite magmas erupted on continental crust could be recycled from "primary" andesite originally produced in oceanic arcs. In summary, the significant contributions and valuable insights provided by this study make it highly deserving of the 2022 Island Arc Award.

日本地質学会論文賞 (1/4件)



対象論文: 入月俊明・柳沢幸夫・木村萌人・加藤啓介・星博幸・林広樹・藤原祐希・赤井一行, 2021, 近畿地方の瀬戸内区に分布する下-中部中新統の生層序と対比. 地質学雑誌, 127, 415–429.

西南日本の中軸に点在する中新統は、かつて瀬戸内中新統として一括されていたが、近年の年代層序の発展に伴って、時代の異なる地層が含まれることが指摘されるようになった。近畿地方にのみ残存する、いわゆる瀬戸内中新統がどんなものか、入月会員らは岩相層序と生層序を長年詳細に調査し、産出した微化石(珪藻・浮遊性有孔虫・貝形虫)に基づき生層序を明らかにした。この論文では、鮎河、綴喜、山辺および山粕の各層群を検討し、微化石層序と古地磁気層序などを組み合わせることによって層群間の年代層序学的関係を明確にした。さらに、他の層群との広域対比を試み、近畿地方から中部地方にかけての広い範囲に分布するいわゆる「瀬戸内区」の中新統が19–15 Maの汎世界的な4回の海水準上昇期に関連して形成された可能性が高いことを指摘した。本研究は、日本海拡大期の本州弧のテクトニクス・古環境・それらへの生物相の応答といった問題について、今後の研究を基礎づけるものである。以上のことから、本論文に日本地質学会論文賞を授与する。

日本地質学会論文賞 (2/4件)



内野隆之・羽田俊樹, 2021, 北上山地中西部の中古生代付加体を貫く白亜紀岩脈群の岩相・年代と貫入応力解析から得られた引張場. 地質学雑誌, 127, 651–666.

前期白亜紀の大島造山運動のとき、北上山地の中古生代付加体には多様な火成岩脈が頻繁に貫入した。筆者らは北上山地の根田茂帯と北部北上帯において、そうした岩脈を、読者が利用できるよう、詳しい位置情報を含めて約80枚記載した。また、放射年代測定によ

り、約130–120 Maに岩脈群が形成されたことを明らかにした。さらにそのうえで、岩脈の姿勢から応力解析を行い、北西-南東方向の引張応力場を検出した。従来、大島造山運動は東西圧縮場下で起こったと考えられていたが、バレミアン～アプチアン期の一時期には引張場に転換した可能性を初めて示した。これは後続の研究で、肯定的に検証されつつある。

筆者らはこの論文で、今世紀に入って革新された、岩脈の応力解析法を利用している。以前の方法では、最大水平応力の方位しかわからず、3本の主応力軸のうちどれが鉛直に近いかを決定できなかったが、今日ではそれが可能になっている。本論文は、この方法を日本の中生代の岩脈群に初めて適用したもので、国内に広く分布する中生界の研究がそれによって展開する可能性を実例によって示した。以上のことから、本論文に日本地質学会論文賞を授与する。

日本地質学会論文賞 (3/4件)



Noda, A., Sato, D., 2018. Submarine slope-fan sedimentation in an ancient forearc related to contemporaneous magmatism: The Upper Cretaceous Izumi Group, southwestern Japan. Island Arc, 27, e12240.

西南日本に分布する和泉層群は、後期白亜紀の前弧海盆にかんする貴重な記録である。本論文は、松山平野で採取されたコア試料に含まれる総厚165 mの和泉層群最下部を対象に、堆積学的・岩石学的な観察、砂岩の組成解析、及び凝灰岩のU-Pb年代から堆積環境の変遷を論じたものである。著者らは、本論文で和泉層群を6つのユニットに細分し、そこに見られる岩相の遷移より、堆積システムが非火山性の泥質斜面または盆地床から、火山砕屑性の砂質海底扇状地に変化したことを示した。また、ジルコン粒子のU-Pb年代から、凝灰岩ユニットが山陽帯の珪長質火山岩に相当することも示した。本論文は、連続性が担保されるコア試料の利点を生かし、研究例の少ない和泉層群の堆積学的検討を行った点において貴重である。また、本論文には、和泉層群、大野川層群、及び領家・山陽帯からの年代データがレビューされており、今後の研究に資するものと期待される。以上の理由から、本論文に日本地質学会論文賞を授与する。

日本地質学会論文賞 (4/4件)



Yoshida, K., Tamura, Y., Sato, T., Hanyuy, T., Usui, Y., Chang, Q., Ono, S., 2022. Variety of the drift pumice clasts from the 2021 Fukutoku-Oka-no-Ba eruption, Japan. *Island Arc*, 31, e12441.

小笠原諸島南方の福徳岡ノ場における2021年8月の噴火は、琉球列島に多量の軽石をもたらし、運輸・漁業関係を中心に大きな影響を与え、マスメディアやSNSなどで大きく取り上げられた。本論文はこのとき放出された軽石について、漂着地での実地調査および岩石学・地球化学的研究を実施し、一連の軽石が多様な色や組織を示すにもかかわらず、全岩組成としては一様な粗面岩質であることを示し、特に特徴的な黒色の軽石が、火山ガラス中の磁鉄鉱ナノ粒子晶出により黒色化していることを明らかにした。ナノ粒子の晶出はマグマの粘性を引き上げるため、噴火機構に大きな影響を与えることが近年注目を集めており、本火山の噴火にもその影響が指摘された意義は大きい。また、漂着現場は「安全な地学教材」としての側面も持つことから、軽石の多様性についての物質科学的な記載整理が速やかになされた点は、アウトリーチの側面からも意義深い。軽石関連現象を網羅的に記述した本論文は、生物学等の分野からの注目度も高い。以上の理由から、本論文に日本地質学会論文賞を授与する。

日本地質学会研究奨励賞 (1/4件)



受賞者：原田浩伸 会員
(東北大学大学院理学研究科地学専攻)

対象論文：Harada, H., Tsujimori, T., Kunugiza, K., Yamashita, K., Aoki, S., Aoki, K., Takayanagi, H., Iryu, Y., 2021. The $\delta^{13}\text{C}$ - $\delta^{18}\text{O}$ variations in marble in the Hida Belt, Japan. *Island Arc*, 30, e12389.

本論文で著者らは、変成炭酸塩岩から造山運動に伴う流体-岩石相互作用や元素移動の記録を解読する手法を一般化するために、飛

騨帯の大理石と石灰珪質岩のC-O-Sr 同位体比を系統的に解析した。掘削コア試料から選別した標本に対して詳細な岩石組織記載に基づくマイクロサンプリングを駆使し、200あまりの点から高精度C-O 同位体値を得た。酸素同位体比の幅は流体との同位体交換によること、石灰珪質岩で見られた低い炭素同位体比は広域変成作用に伴う脱炭酸反応によるものと結論づけた。国内の地質試料で脱炭酸反応を岩石学的観察と同位体地球化学の双方から解析し、地殻内における炭酸塩の挙動解明に向けた可能性を示したことは特筆に値する。これらのことから、原田浩伸らによるこの論文に日本地質学会研究奨励賞を授与する。

日本地質学会研究奨励賞 (2/4件)



受賞者：佐久間杏樹 会員
(東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻)

対象論文：Sakuma, A., Kano, A., Kakizaki, Y., Tada, R., and Zheng, H.,

2021. Upper Eocene travertine-lacustrine carbonate in the Jianchuan basin, southeastern Tibetan Plateau: Reappraisal of its origin and implication for the monsoon climate. *Island Arc*, 30, e12416.

アジアモンスーンシステムの成立について、ヒマラヤ-チベットの隆起との関連性が古くから論じられてきたが、その開始時期はいまだ明確ではない。近年のチベット周辺地域の研究では、後期始新世に起こった明瞭な湿潤化がモンスーン気候の始まりを示すと示唆されている。その根拠の一つは、湖水成とされた中国雲南省剣山盆地のJiuziyan 層である。本研究で佐久間会員らは、Jiuziyan 層の炭酸塩堆積物の層序、堆積相、同位体組成を調査し、従来の見解を再検討した。その結果、炭酸塩は湖水成ではなくトラバーチンであり、その酸素・炭素同位体比に年縞と考えられる明瞭な周期的変化があることが示された。本研究は、始新世後期においてこの地域に降水量の季節変化があったことを再確認したものである。本研究は佐久間会員が学位研究の一部として主体的に進めたものと認められ、グローバルな視点から主に炭酸塩岩の野外調査と地球化学的分析を行う能力がうかがえる。以上のことから、佐久間杏樹会員らによる本論文に、日本地質学会研究奨励賞を授与する。

日本地質学会研究奨励賞 (3/4件)



受賞者：鈴木康太 会員
(エネルギー・金属鉱物資源機構)

対象論文：Suzuki, K., Kawakami, T., Sueoka, S., Yamazaki, A., Kagami, S., Yokoyama,

T., Tagami, T., 2022. Solidification pressures and ages recorded in mafic microgranular enclaves and their host granite: An example of the world's youngest Kurobegawa granite. *Island Arc*, 32, e12462.

本論文は、世界で最も若い黒部川花崗岩に広く分布する角閃石を含む苦鉄質火成包有岩(MME)に注目し、それと母岩である花崗岩の固結圧力が一致することを示した。また、MME のジルコンU-Pb年代が母岩よりも若干古いことを明らかにした。母岩のジルコンは斜長石コアと基質に産するのに対し、MME では基質にのみ産する。その観察にもとづいて、著者らは母岩とMME のジルコンが、それぞれ初期晶出相と末期晶出相と解釈し、MME のジルコン年代のほうが岩体の固結年代として適切であると考察した。本論文は、母岩に角閃石を欠く花崗岩体でもMMEを用いた固結圧力・年代決定の有効性が示され、世界各地の若い花崗岩体に適用することで急速な隆起・削剥メカニズムの解明に寄与することが期待される。以上の重要な貢献により、鈴木康太会員らによるこの論文に、日本地質学会研究奨励賞を授与する。

日本地質学会研究奨励賞 (4/4件)



受賞者：山岡 健 会員 (産業技術総合研究所地質調査総合センター)

対象論文：Yamaoka, K., Wallis, S. R., 2022. Recognition of broad thermal anomaly around

the median tectonic line in central Kii peninsula, southwest Japan: Possible heat sources. *Island Arc*, 31, e12440.

三波川帯の低変成度部が中央構造線と接する。紀伊半島高見山地域を対象として、著者らは詳細なマッピングと構造解析をおこなった。また、砕屑粒子を用いた歪み解析および炭質物ラマン温度計分析を稠密に行うことで、中央構造線へ向かう3 km規模の温度上昇構造を描出し、また、この温度上昇が塑性変形の変形度とは無関係であることを示した。さらに、熱モデル計算によるフィッティングから、温度上昇の主要因は断層活動に伴う剪断熱ではなく、高温流体の流入にあったことを論じた。この結論は、紀伊半島の既存研究と異なる新たなものである。また巨大断層帯周辺の地質現象を探る上で、広く適用可能な総合的アプローチを示した点も高く評価出来る。以上の理由から、山岡健会員らによる本論文に日本地質学会研究奨励賞を授与する。

日本地質学会フィールドワーク賞 (1/2件)



受賞者：江島圭祐 会員
(山口大学大学院創成科学研究科)

対象論文：Eshima, K., 2021. Anatomy of Shaku-dake high-Mg diorite, southwest

Japan: Lithofacies variations and growth process of high-Mg diorite stock. *Journal of Mineralogical and Petrological Sciences*, 116, 83-95.

本論文は北部九州の白亜紀尺岳閃緑岩体について、登攀技術を駆使した徹底的な野外調査および高密度サンプリングをもとに、マグマ上昇から定置までの詳細な三次元的履歴を明らかにした。幾つかのマグマ注入ポイントから岩脈状に上昇したマグマが、ある特定の深度で半固結状態の岩体中心部に向かってシル状に併入する過程が複数回繰り返され、岩体が成長したことを示した。このような詳細なマグマ上昇・定置履歴は、岩体周縁部の層状構造や母岩への貫入様式などの野外産状の

綿密な記載と、高密度の全岩化学組成・モード組成および記載岩石学的データに基づいている。本論文で示された三次元的なマグマ定置モデルは、単純な境界条件を仮定した従来の数値計算からは描像し得ないものであり、地殻内部におけるマグマ定置プロセスの理解を向上させる研究として高く評価される。以上の理由により、本論文に日本地質学会フィールドワーク賞を授与する。

日本地質学会フィールドワーク賞 (2/2件)



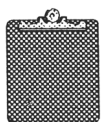
受賞者：羽地俊樹 会員
(産業技術総合研究所地質調査総合センター)

対象論文：Haji, T. and Yamaji, A., 2020, Termination of intra-arc rifting at ca 16 Ma in the

Southwest Japan arc: The tectonostratigraphy of the Hokutan Group. *Island Arc*, 29, e12366.

日本海が拡大した中新世の前半、いわゆるグリーンタフが日本海沿岸を厚く覆った。こ

の論文が対象とした兵庫県北部の北但層群は、山陰地方のグリーンタフを代表する比較的厚い地層だが、層序の概要が20世紀半ばに報告されて以来、研究が停滞していた。羽地俊樹氏は丹念な地表踏査により、北但層群内の二層準で不整合を発見し、それにもとづいて同層群の堆積中に沈降したハーフ・グラーベンを二つ発見した。そして、それらのグラーベンを画する正断層が、東北日本弧のグラーベン境界断層より変位量で一桁小さいことに注目し、西南日本弧の伸長変形が相対的に小さかったことを示唆した。これは、日本海拡大時に西南日本がほぼ一体としてドリフトしたという説を支持する結果である。さらには、16 Ma 頃に伸長変形が終わったことも示した。これは、古地磁気から示唆されている西南日本弧の回転終了と同時にあり、また、15 Ma まで伸長テクトニクスが続いたとする通説の見直しを迫る成果である。以上のような成果は、詳細なルートマップや地質図、断面図、写真によって裏付けられている。以上のことから、この論文に日本地質学会フィールドワーク賞を授与する。



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

JAAS年次大会2023 「会に行ける科学者フェス」

主催：日本科学振興協会（JAAS）
会期：2023年10月7日（土）～13日（金）
10月7日（土）～9日（月祝）：ハイブリッド開催
10月10日（火）～13日（金）：オンラインのみ
会場：秋葉原UDX（〒101-0021 東京都千代田区外神田4-14-1）
日本科学振興協会（JAAS）は「日本の科学をもっと元気に！」を合言葉に昨年設立されたNPO法人です。JAAS年次大会2023「会に行ける科学者フェス」では、一般市民が普段接することの少ない科学者に会って話をする機会を提供すること、狭い場に籠もりがちな科学者がその熱意を広く社会に伝えることのできる場を設けること、そして科学者と異分野・異業種のエキスパートが出会い新しい発想やイノベーションが生まれるきっかけになることを目指します。科学者の皆さまによる一般市民向けのわかりやすいポスター発表/展示やシンポジウム/ステージ企画のご提案をぜひお願いいたします。
ポスター/展示演題募集締切：7月21日（金）
詳しくは、<https://meetings.jaas.science/>

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけまようお願い致します。



応募

令和5年度神奈川県立生命の星・ 地球博物館 学芸員 （地質学（鉱物学））採用選考

- 採用予定分野
 - 分野：地質学（鉱物学）
 - 職務内容：地質学（鉱物学）を中心とした調査研究、資料収集、整理・保管、展示・普及教育、レファレンスなど博物館において学芸員が行う業務
 - 採用予定数：1名程度
 - 採用年月日：令和6年4月1日予定

2. 受験資格

昭和59年4月2日から平成12年4月1日まで生まれた人で、学芸員の資格を有する人又は令和6年3月31日までに取得見込みの人（外国籍の人も受験できますが、外国籍で就職が制限される在留資格の人は、採用されません。）

3. 選考日・選考会場

第1次選考：令和5年9月24日（日）
第2次選考：10月下旬から11月下旬（予定）
合格者の発表

第1次合格者発表：令和5年10月中旬（予定）
最終合格者発表：令和5年12月上旬（予定）

受付期間：令和5年7月10日（月）から8月10日（木）（消印有効）

9 問合せ先・提出先
神奈川県教育委員会教育局総務室人事グループ

〒231-8588 横浜市中区日本大通1（神奈川県庁東庁舎8階）

電話 045（210）8034

提出書類、勤務条件等詳細は、下記を参照してください。

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/u5t/cnt/saiyousenkou.html>

大阪公立大学理学研究科地球学 専攻 准教授（女性限定）公募

募集人員：准教授1名（女性限定）

所属：理学研究院・理学研究科・地球学専攻・地球環境学分野

研究分野の内容：第四紀自然学（新生代、特に第四紀を対象とした地球科学分野）

職務内容（予定）

教育：・地球学科・地球学専攻が提供する、学部における基幹教育科目・専門科目や、大学院における専門科目・研究指導科目など。/
・学部学生ならびに大学院学生（博士前期・後期課程）の研究指導。

研究：・野外で採取された試料の各種解析や、野外調査に基づく第四紀自然学分野の研究。

その他：・大学の管理・運営にかかる業務。/
・社会貢献活動。

着任予定時期：2024年4月1日

勤務形態：常勤（任期の定め：なし）

勤務場所：大阪公立大学杉本キャンパス

応募資格：・女性であること。/
・博士の学位を有すること。/
・博士の学位取得後、おおむね10年以内であることが望ましい。/
・学部・大学院における基幹教育科目・専門科目・研究指導科目などを担当できること。/
・学部学生・大学院学生（博士前期・後期課程）の研究指導を担当できること。/
・第四紀自然学分野の研究を行い、十分な成果が見込めること。/
・本学所属の教員と協力して大学運営を推進できること。/
・大学の管理・

運営に関する能力と熱意のあること。

応募締切：2023年9月15日（金）消印有効

問合せ先：

〔専門分野関係〕大阪公立大学・理学研究院・理学研究科・地球学専攻

担当者 篠田 圭司

E-Mail shinodakeiji@omu.ac.jp, 電話：06-6605-3173

〔募集全般〕公立大学法人大阪 事務局 総務部 人事課

電話：072 254 9105（ダイヤルイン）

応募賞類等公募の詳細は、<https://www.omu.ac.jp/research/recruit/faculty/entry-00263.html>

各賞・ 研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

2023年度「朝日賞」 候補者推薦依頼

朝日新聞社、朝日新聞文化財団より、標記の推薦依頼がありましたので、お知らせします。

「朝日賞」は、1929年（昭和4年）に朝日新聞創刊50周年記念事業として創設されました。学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈ります。原則として年度賞とし、毎年1月から12月までの業績を対象とします。長年にわたる業績に対してお贈りすることもあります。

推薦書は2023年8月25日（金）までに、所定様式送付となりますので、**推薦を希望される方は8月3日（木）までに、執行理事会宛にご連絡下さい。**推薦票の記入内容については、学会事務局までお問い合わせ下さい。

（注）学会からの推薦枠は原則1名（最大2名）です。年齢、国籍に制限はありません。

問い合わせ先：

朝日新聞社 朝日新聞文化財団

朝日新聞社 朝日賞事務局

〒163-0210 新宿区西新宿2-6-1新宿住友ビル10階

（株）朝日カルチャーセンター内

TEL 03-6304-5987

2023年度大型計算機 共同利用公募研

地震・火山・防災の関連分野に関連した大規模計算を行う研究課題を公募するものです。

採択課題には、東京大学情報基盤センターの大型計算機の計算資源を配分いたします。

公募要領：

https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2023/07/2023-3_supercomputer.pdf
研究期間：採択日から令和6（2024）年3月末まで

申請方法：WEB申請

申請期限：2023年8月31日（木）【厳守】

なお、申請に際しては、下記のwebページより、詳細や様式についてご確認いただきますようお願いいたします。

【共同利用ホームページURL】

<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/kyodoriyou/>

【共同利用WEB申請システム】

<https://erikyodo2.conf.itlas.jp/login>

【書類提出、問い合わせ先】

〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学地震研究所 研究支援チーム（共同利用担当）

電話：03-5841-1769, 5710

FAX：03-5689-4467

E-mail: k-kyodoriyou@eri.u-tokyo.ac.jp

関西エネルギー・リサイクル科学 研究振興財団助成事業募集

公益財団法人 関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団は、総合防災科学やエネルギー・リサイクル・環境の研究に従事する研究者への支援のため、助成事業の募集をしています。

助成の趣旨：

①総合防災科学分野：地震等の異常な外力による自然災害、なかでも人口や社会インフラが集中する都市で起こる災害は、社会構造や人間行動様式等により災害形態や被害規模が大きく異なるため、人文・社会科学的視点での研究が重要です。また、自然災害の発生を完全に防止することは不可能であるため、被害の軽減・極小化を図ることが重要です。その上で、軽度な損傷が生じたとしても、その主機能は失われない、あるいは、早期に機能が回復するハードやシステムを形成することが大切となります。被害を受けても早期に復旧する電力等のライフラインや社会・情報システムがその具体例と言えるでしょう。この観点から、防災、減災等、幅広い視点での総合防災科学分野の研究等に対する助成を行います。

②エネルギー・リサイクル分野：人間活動と地球環境の調和を図りながら、社会・経済の持続的な発展を将来にわたって続けていく上で、電気エネルギーをはじめとする各種エネルギーの供給利用や資源リサイクル分野の研究活動を一層充実・強化していく必要があります。また、人類の喫緊の課題である地球温暖化問題の解決を目指す上で、電気エネルギーをはじめとする各種エネルギーの供給・

利用、再生可能エネルギー、省エネルギーや環境・リサイクルに関する技術やシステム等の一層の発展が大きな鍵を握っていると期待されています。

この観点から、エネルギー・リサイクル分野における研究等に対する助成を行います。

対象分野：①総合防災科学分野、②エネルギー・リサイクル分野において、助成の趣旨に合った、自然科学、人文・社会科学、および両者が融合した幅広い分野の基礎研究および応用研究を対象とします。

助成種類と助成額（1件あたり）：①研究助成 100万円以下/②-1 国際交流活動助成（研究者海外渡航） 20万円以下/②-2 国際交流活動助成（海外研究者招聘） 50万円以下（※今回は「総合防災科学分野」のみ募集）/③研究成果の出版助成 10万円以下/④研究発表会等の開催助成 40万円以下（※②-1、④はオンライン開催、③は指定期間内掲載済の一部、も対象とします）

申込者の資格：主として関西地域（北陸3県を含む）の大学院、大学の学部、短期大学、高等専門学校、大学附置研究所、大学共同利用機関に勤務する研究者（②-1、③は博士後期課程の大学院生を含む）

応募締切：① 2023年8月31日（木）

②-1、②-2、③、④ 2023年7月31日（月）

応募方法：財団ホームページ（<https://www.krfor.jp>）から電子申請によるお申込みができます。

詳細、お問い合わせ等：

公益財団法人 関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団

e-mail：info@krfor.jp TEL：06-7506-9068

第45（令和5年度） 沖縄研究奨励賞推薦応募

沖縄研究奨励賞は、沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成することを目的として、昭和54年に創設されました。本奨励賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学、人文科学、社会科学）を行っている新進研究者（又はグループ）の中から、受賞者3名以内を選考し、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰するものです。

応募資格は、学協会・研究機関若しくは実績のある研究者から推薦を受けた50歳以下（2023年7月15日現在）の方で、出身地及び国籍は問いません。

応募資格：

学協会・研究機関若しくは実績のある研究者から推薦を受けた50歳以下の者で、2023年7月15日現在で50歳以下の者

応募方法：

(1)「沖縄研究奨励賞推薦応募用紙」

(2) 研究成果物（論文3点以内、著書がある場合は1冊）

(3) 研究成果物の要旨（それぞれA4判横書き各1,000字以内、要旨は日本語とする）

(4) 研究業績リスト（著書、論文等30点以内、A4横書き）

応募書類の提出先：

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町17-6 201

公益財団法人沖縄協会「沖縄研究奨励賞」係
応募締切：2023年9月30日（当日消印まで有効）（学会締切9月5日）

詳しくは、<http://www.okinawakyoukai.jp/>

CALENDAR

2023.7～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共)共催、(後)後援、(協)協賛。

2023年

8月 August

第32回 地質汚染調査浄化技術研修会 (座学オンライン第4回目)

8月4日(金) 19:30～21:30

内容：地質汚染調査入門その1 地質環境問題の歴史と地質汚染 他

講師：風岡 修(地質汚染診断士、理学博士)

参加費：無料(事前登録制)

<http://www.npo-geopol.or.jp/sympo.htm>

科学教育研究協議会第69回全国大会

8月4日(金)～6日(日)

会場：与野本町コミセン、埼玉県立与野高等学校(さいたま市中央区本町)

<https://kakyokyo.org/>

(共) 岩石-水相互作用(WRI-17) または応用同位体地球化学(AIG-14) 合同国際会議

8月18日(金)～22日(火)

会場：仙台国際センター

<https://www.wri17.com/>

第32回 地質汚染調査浄化技術研修会 (座学オンライン第5回目)

8月18日(金) 19:30～21:30

内容：地質汚染調査入門その2 透水層の對比方法、地質汚染調査手順の概要 他

講師：風岡 修(地質汚染診断士、理学博士)

参加費：無料(事前登録制)

<http://www.npo-geopol.or.jp/sympo.htm>

第77回地学団体研究会総会(ちちぶ)

8月19日(土)～20日(日)

開催方式：現地開催とオンラインのハイブリッド方式

現地会場：秩父市歴史文化伝承館(埼玉県秩父市)

<https://www.chidanken.jp/>

WCFS2023 Japan: Floating Solutions for the Next SDGs

8月28日-29日：論文発表等

8月30日：テクニカルツアー

場所：日本大学理工学部(東京都千代田区神田駿河台)(予定)

<https://wcfs2023.nextsdgs.org/>

9月 September

第40回歴史地震研究会(小田原大会)

9月1日(金)～3日(日)

会場：小田原三の丸ホール(神奈川県小田原市本町1丁目7-50)

<https://www.histeq.jp/index.html>

(後)第66回粘土科学討論会

9月12日(火)～13日(水)

会場：戦災復興記念館(仙台市青葉区大町)

<http://www.cssj2.org/>

日本鉱物科学会2023年年会・総会

9月14日(木)～16日(土)

会場：大阪公立大学杉本キャンパス(大阪市住吉区杉本)

<http://jams.la.coocan.jp/>

★日本地質学会第130年学術大会(2023京都)

9月17日(日)～19日(火)

会場：京都大学

2023年防災推進国民大会(ぼうさいこくたい)

9月17日(日)～18日(月・祝)

場所：横浜国立大学(横浜市保土ヶ谷区常盤台)

<https://bosai-kokutai.jp/2023/>

(共) 2023年度日本地球化学会 第70回年会

9月21日(木)～23日(土)

開催場所 東京海洋大学品川キャンパス会場(一部ハイブリッド)

口頭(ハイブリッド)、ポスター(対面)

<http://www.geochem.jp/meeting/>

10月 October

(協) Techno-Ocean 2023

10月5日(木)～7日(土)

会場：神戸国際展示場2号館ほか

<https://to2023.techno-ocean.com/>

JAAS年次大会2023「会いに行ける科学者フェス」

10月7日(土)～13日(金)

会場：秋葉原UDX(東京都千代田区外神田)&ハイブリッド

<https://meetings.jaas.science/>

国際 Gondwana 研究連合(IAGR) 2023年総会及び第20回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

10月8日～9日(シンポジウム)

10月10日～11日(糸魚川ユネスコ世界ジオパーク野外巡検)

会場：新潟大学中央図書館ライブラリーホール(新潟市西区五十嵐2の町8050)

問い合わせ：M. Satish-Kumar, iagr2023@geo.sc.niigata-u.ac.jp

geo.sc.niigata-u.ac.jp

2023年度日本火山学会秋季大会

10月18日(水)～21日(土)

会場：かごしま県民交流センター(予定)

<http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/>

12月 December

地質学史懇話会

12月17日(日) 13:30～17:00

場所：王子、北とびあ 805号室

小澤健志：ライブニッツ(1646-1716)から見た

P.ハルツィングの風車・水車計画

矢島道子：日本最初の理学博士保井コノ

問い合わせ：矢島道子 pxi02070@nifty.com



博物館・ジオパークで地球を学ぼう！(19)
公益財団法人益富地学会館

鉱物・化石・岩石のアマチュア研究家のメッカ

公益財団法人益富地学会館 主任研究員 大井修吾

会館の概要

当会館は昭和48年に益富壽之助博士により、その前身である「日本地学研究会」として創設され、平成3年に財団法人化したしました。またその際に名称も「益富地学会館」に変更されました。また平成24年8月1日には内閣府所管の「公益財団法人益富地学会館」へと移行しました。

建物は鉄骨3階建、床面積300m²、所蔵標本20,000点、数千冊の地学関連蔵書、偏光顕微鏡、X線粉末回折装置などを含む研究用機器が基礎となり、年々標本や書籍などが充実され、今日に至っています。

年間10,000人の見学者が訪れる鉱物・化石・岩石研究のメッカとして国内外に有名な施設です。

3階：標本展示物

当会館3階の標本展示室に上がるまでの階段と踊り場には50cmを超えるアンモナイト化石や抱えるほどの煙水晶、かつては真っ赤に溶けていた様子を思い起こさせる真っ黒な溶岩、そして採集会の様子などを写したパネル写真が展示されています。

標本展示室には水晶や黄鉄鉱、曹長石、こんにゃく石、象牙化石、紫水晶など、様々な石が展示されています。またガラスケースには様々なテーマのもとに置かれた特別展示

の標本が解説パネルと一緒に展示されています。

カウンター内には質問にお答えする展示解説員がいます。また来館された方がご自身で採集された岩石や鉱物をお持ちいただいた場合は、肉眼による鑑定も行っております。(鑑定料：会員様無料、一般の方は有料)

カウンター内には薄片と偏光顕微鏡を設置しており、岩石の薄片資料を観察することができます。また双眼顕微鏡も2台設置しており、岩石や鉱物の細かな部分を立体的に観察することができます。これらの器具はどなた様もご自由にご使用いただけます。

当会館の標本展示室は土・日・祝日のみの一般公開ですが、事前にお問い合わせいただいた学校の授業や研修などで来られる団体様には平日も公開いたしております。入館料は300円、18歳以下は無料です。

また当会館会員様のみとなりますが、ガラスケース下の標本引き出しの資料をご覧になり、研究にお役立ていただけます。

2階：図書室・研究室・休憩室

会館の2階は、図書室と研究室、休憩室などで構成されております。2階はすべて会員様のみのご使用となります。

図書室には数千冊にのぼる地学関係の書籍や資料、地質図などを配架しており、休憩室

info

公益財団法人益富地学会館

〒602-8012

京都市上京区出水通烏丸西入中出水町394

<https://masutomi.or.jp/>

でこれらの資料をゆっくりご覧いただけます。

研究室には岩石切断機や研磨機、薄片製作用具一式、双眼偏光顕微鏡などを設置いたしております。薄片をご自身で製作することもできます。また他にも当館研究員にご依頼いただかねばなりません。X線回折装置で鉱物の成分分析をすることも可能です。

1階：標本・書籍・採集道具の販売

鉱物標本・標本採集に必要な道具・標本整理に必要な道具・書籍などを販売しています。書店では販売していない書籍もあります。

鉱物標本を除き、販売している物品についてホームページから確認することができます。

主な所蔵資料

当会館の標本は益富壽之助先生が採取された標本・購入された標本・会館に寄贈された標本が中心となります。益富先生は昭和12年に「日本地学趣味の会（現日本地学研究会）」を創設しており、それ以降に入手した標本が中心となります。

当会館では国内産の鉱物標本を中心に様々な鉱物・化石を所蔵しています。会員様のみではありますが、当会館では多数の国内産鉱物標本を閲覧することができます。

また当会館の図書室では「日本地学趣味の会」創設以降発行を続けている「我等の鉱物（1932-1941）」「地殻の科学（1942-1944）」「研究報告（1944, 1945）」「鉱物と地質（1946-1951）」「趣味の地学（1951, 1952）」「地学研究（1952-）」を閲覧することも可能です。

鉱物鑑定・分析

当会館では肉眼による鉱物鑑定・粉末X線回折法による鉱物同定・岩石薄片の作成及び・偏光顕微鏡による検査を有料で請負って



3階展示室の様子



玄関に展示されているベグマタイト



薄片作成教室の様子



野外観察会の様子 (和歌山県南風峠にて)



かわらの石の観察会の様子 (京都府桂川にて)



化石のクリーニング教室の様子

います。

また現在準備中ではありますが、走査型電子顕微鏡による観察及びそれに付属のエネルギー分散型X線検出器による化学組成の分析を使用した鉱物同定も予定しております。

イベント・催し物

当会館では様々なイベントを開催しております。詳しくはウェブページでご確認ください (<https://masutomi.or.jp/pages/55/>)。

2022年度は川原に行っかわらの石を観察・採集するイベントを2回、山に行っ岩石・地層などを観察して鉱物を採集するイベントを2回行いました。また4回の野外観察会のうち2回は、前の週に野外観察に関連した地質の見どころの解説や岩石・鉱物の標本の観察など、事前講習会を開催しました。

また益富地学館内において「化石のクリーニング教室」「かわらの石を調べる教室」「石に名前を付ける会」を開催いたしました。「化石のクリーニング教室」はクリーニング用の化石を当会館で準備し、化石のクリーニング体験や化石のレプリカ作りを行いました。「かわらの石を調べる教室」では、野外の観察会で採集したものを中心に名前がわからない石、について、指導員とともに石の名前や由来について考えるイベントです。「石に名前をつける会」は小中学生のみを対象としたイベントで、石に関する夏休みの自由研究について、岩石・鉱物・化石などの名前やでき方、石の割方、標本の整理方法、レポートのまとめ方などを指導しました。

また京都市勧業館「みやこめっせ」にて「特別地学講座」と「石を楽しむ新春交流会」を行いました。「特別地学講座」は地学や鉱物学に関連した講演会を行いました。また「石を楽しむ新春交流会」では標本の即売会をはじめ、講演会などを行いました。

2022年度はコロナ禍ということもありイベントにも制約がありましたが、制約の緩和に伴い2023年4月8日にはバスをチャーターして和歌山県広川町・湯浅町方面への化石の観察・採取会を行いました。今後もチャーターバスを用いたイベントや宿泊を伴う大きなイベントを企画するつもりです。

ミネラルショー「石ふしぎ大発見展」

当会館は西日本最大規模のミネラルショー

である「石ふしぎ大発見展」を主催しています。1年に2回、春には大阪の天満橋OMMにて、秋には京都市勧業館「みやこめっせ」にて開催しています。様々な石を扱う業者の出展をはじめ、講習会・講演会・特別展示・イベントなども実施しています。例えば2022年秋の京都ミネラルショーの講習会は、『鉱物のABC』というタイトルで鉱物に興味を持ち始めた方を対象として、鉱物を実際に肉眼で見分けるためのポイントなどに関するものでした。また2023年春の大阪ミネラルショーでは、『加茂七石の研究－鞍馬石を中心に－』『化石を調べに世界をめぐる』というタイトルで講演会を開催しました。特別展示は秋の京都ショー・春の大阪ショーで「関西の魅力大発見 (I)・(II)」というタイトルで、関西6府県で注目される鉱物・化石・岩石・地質現象についてそれぞれ (I) では10個・(II) では8個のテーマを厳選して展示しました。イベントは、「ノーブル マーブル アンサンブル」というタイトルで、大理石・金箔・銀箔を用いたオリジナルペーパーウェイトを作成するというものでした。また鉱物・岩石の無料鑑定会も実施し、カットされていない天然の鉱物・岩石について鑑定してほしい石を希望者に持ち込んでいただき肉眼鑑定しました。

鉱物鑑定検定

当会館では鉱物の肉眼鑑定ができるようになる『鉱物鑑定検定』を1996年から実施しており、これまでに2000人以上の方に受検していただいています。9級～1級まであり、小学3年生以上の方から受検可能です。

また当会館では鉱物鑑定に役立つ情報など

を掲載した『ストーンサークル』という案内誌を年2回発行しており、鉱物鑑定検定を受検された方に配布しています。

会館の会員

当会館では「益富地学会館会員」と「日本地学研究会」について取りまとめています。

・益富地学会館会員

毎月『館報』を発行しており、会員の方に頒布しています。館報には鉱物など石に関わるコラムや益富地学会館の携わる各種イベント情報などを掲載しています。

その他、益富地学会館会員の方は、石の肉眼鑑定料が無料、会館入館料が無料、各種イベントの会員価格での参加、2階図書室の利用、展示室の標本の閲覧などを行うことができます。

・日本地学研究会

年に2回、『地学研究』という、一般の方の自らの研究成果を発表するための冊子を出版しており、日本地学研究会会員の方に頒布しています。また会員はこの冊子に投稿していただくことができますし、また研究成果を発表した経験の少ない方もこの冊子に投稿できるように、当館研究員が文章の添削アドバイスをしています。

日本地学研究会会員の方の研究が円滑に進められるように、会員の方は当会館の研究設備の使用及びそれを用いた分析依頼について割引価格にて承っております。また益富地学会館会員と同様に2階図書室を利用できたり、各種イベントを会員価格で参加できたり、各種検査・鑑定について会員価格にて依頼することができます。



石ふしぎ大発見展の特別展示



地学研究

日本列島はプレート収束帯に位置し、西南日本ではフィリピン海プレートが沈み込み、東北日本では太平洋プレートが沈み込んでいます。さらに、伊豆-小笠原諸島では、太平洋プレートがフィリピン海プレート下へ沈み込んでいるなど、複雑なプレートの沈み込みが起きています。日本における多くの地質現象は、このプレートの沈み込みに起因するため、これらの複雑なプレートの沈み込みを理解することは地質学的に重要です。しかしながら、様々な要素が絡み合うプレート沈み込みの理解は、特定の地域における限定的な事例からだけでは困難です。したがって、多様性と普遍性を理解するためには、世界中の様々な沈み込み帯を比較するアプローチが必要となります。しかしながら、日本だけでなく世界中の沈み込み帯の膨大な情報を収集することは膨大な作業が必要となります。そのため、我々はSubmapという、世界の沈み込み帯における各種データを収集・公開し、インタラクティブに閲覧可能なシステムを紹介します。

Submap (<https://submap.gm.umontpellier.fr/>) はGéosciences Montpellier (フランス モンペリエ) のDr. Serge Lallemantを中心としたグループ (以下、制作グループ) が構築したデータベースおよび閲覧システムで、沈み込み帯の比較研究を行うために各種のデータを収集しています。現在、データベースには200以上のパラメータが含まれており、ダウンロード可能な地図、断面図、データシートで提供されています。データベースの構築には、20以上のグローバルデータベースを参照し、制作グループが行った10以上の研究成果をデータベースに反映しています (Submapページ内のSOURCEを参照)。数回のクリックで指定した地域の各種情報を描画できる機能があり、利用者はデータベースを独自に処理することなく内容を確認できます。Submapの開発には、初期バージョンから10年以上にわたる制作グループの経験が生かされています。2023年6月には、最新版である第5版 (V5.0) が公開されました。

ここで、Submapの主な機能について簡単に紹介します。Submapは以下の4つのツールで構成されています (図1)。

- MAP-Geodyn
- SECTION-Geodyn
- MAP-Subquake
- Sub-DATA

MAP-Geodynは、地図上で緯度経度の範囲を指定し、各種データをオーバーレイした地図を作成できます。地形データや海底の年代、フリーエア重力異常、海洋底の堆積物の厚さなど、様々な情報を描画できます。完新世の火山分布や震源の分布といったポイント情報の表示も可能です。また、沈み込み帯のプ



<https://submap.gm.umontpellier.fr/>

レート境界では、沈み込むプレートの運動、上盤プレートの運動、それらから見積もられる海溝の運動、及びプレート間の相対速度をベクトルとして表示することもできます。

SECTION-Geodynは、地図上で緯度経度の測線を指定し、沈み込み帯の断面を表示する機能です。地形断面だけでなく、フリーエア重力異常、地殻の厚さ、海洋底の堆積物の厚さをプロファイルとして表示することができます。さらに、沈み込むスラブの上面形状や、地震の震源を描画することも可能です。

MAP-Subquakeは、沈み込み帯における地震に特化した機能で、過去に発生した地震と沈み込み帯、特に海洋プレートのジオメトリに関連した情報を閲覧できます。地図上で緯度経度の測線を指定することで、指定した範囲の海洋プレート面の粗さを表示できるほか、海山やファブリックなどをオーバーレイし、海洋プレートのテクスチャに関する情報を表示することもできます。さらに、Mw 7.5以上の地震を含む182イベントの破壊域を含むデータベース (SubQuake) を投影することも可能です (図2)。

Sub-DATAは、予め指定された測線における沈み込み帯の各種幾何学的情報を閲覧することができます。例えば、沈み込むプレートの表面粗さ、トレンチにおける堆積層の厚さ、沈み込むスラブの沈み込み角、プレート間の運動方向などを閲覧したりダウンロードしたりすることが可能です。

Submapの利便性と多様なデータアクセス性から、多くの研究で利用されています (Submapページ内のRELATED PUBLICATIONSを参照)。個人的には、これらのデータベースを使用した研究の一覧 (とはいえ、全てを網羅しているわけではありません) も、沈み込み帯の比較研究を把握する上で大変有益でした。また、各種データの描画の容易さから、制作グループは研究目的だけでなく、高校や大学などの教育目的での利用も期待しています。余談となりますが、Submapのデフォルトで設定されている地域が日本周辺であることは、日本のユーザーにとって利便性が高いと言えるでしょう。

日本地質学会の会員の皆様も、自身の研究や業務の中で日本

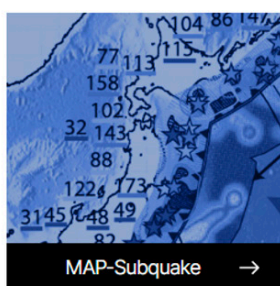
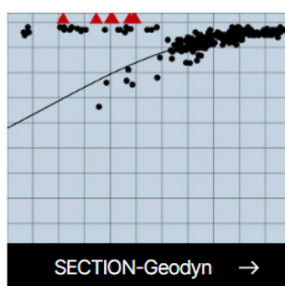
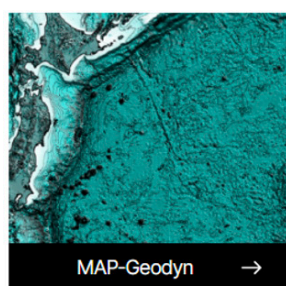


図1 Submapの4つのツール

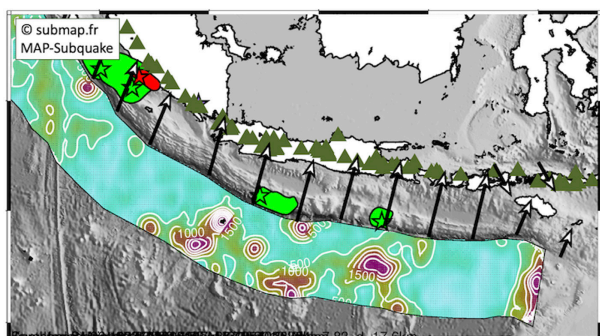


図2 Submapの使用例 (Submapウェブページより)

周辺や世界の沈み込み帯における各種情報が必要な場面が多くあると考えます。そのような際にまず初めに閲覧するウェブサービスとして、このSubmapを推薦します。多様な地質学的現象の理解を深め、より具体的な地質学的問いに対する答えを見つけるための一助となることでしょう。

Submap: a tool for mapping subduction zones

Submap team (S. Lallemand, N. Cerpa, M. Peyret & A. Heuret)

<https://submap.gm.umontpellier.fr/>

表紙紹介

第14回惑星地球フォトコンテスト入選 「一期一会の姿」

写真：藤倉聖也（群馬県）



【撮影場所】東京都 伊豆諸島新島

【撮影者より】東京は伊豆諸島・新島で出会った大きな断層「白ママ断崖」。古代噴火で形成されたそうで、歴史の重みと地球の営みの威厳を、真横から眺めることで感じ取ることができた。ここはコーガ石という軽石で形成されているので、台風・地震・風化でどんどん崩れているそう。島で出会ったおばあさんの「10年後には全然違う姿になるだろうね」という言葉が印象的で、まさに“生きている”地球の証で、この一期一会の姿に感謝だ。

【審査委員長講評】新島の東海岸にある白ママ断崖を望遠レンズで南に向けて撮影した作品です。遠景は南2km沖にある早島（はんしま）です。このような露頭は日差しが強く当たると影ができてしましますが、この作品では全体に光が回って地層ごとの粒度の違いが読み取れます。断崖が新鮮で草などに覆われていないのが気持ち良いです。遠景に人などを入れて露頭の巨大さがわかるとさらによかった。（白尾元理）

【地質解説】東京都の新島は、島の南北および周辺の属島である式根島などを形成する複数の溶岩ドームからなる火山です。この写真が撮られたのは新島の東海岸、羽伏浦の南方にある白ママ断崖と呼ばれるところです。断崖を構成する地層は主として、マグマ水蒸気噴火の際に発生した火砕流の一種であるベースサージの堆積物で、西暦886～887年に噴火したと考えられる島南部の向山溶岩ドームが噴出する際に形成されました。新島の中央部、空港や集落のある平坦地はこのベースサージ堆積物の上面にあたります。（萬年一剛：神奈川県温泉地学研究所）

訂正

ニュース誌6月号掲載の、表紙紹介 第14回惑星地球フォトコンテスト：ジオ鉄賞「日南海岸の洗濯岩」の記事（p.12）において、撮影場所の表記に誤りがありました。訂正し、お詫びいたします。

（誤）兵庫県 南あわじ市阿那賀海岸

（正）宮崎市、JR日南線（内海－小内海間）

地質学雑誌

地質学雑誌は、2022年（128巻）からは完全電子化となりました。会員の皆様に、公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja>

新しい論文が公開されています

巡検案内書 瀬戸内区中新統：鮎河層群と綴喜層群 入月俊明, 栗原行人

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2023.0003>

瀬戸内区中新統の、従来、第一瀬戸内累層群と呼ばれた下部中新統上部～中部中新統下部は様々な化石を豊富に含んでいることから、古くより地質学・古生物学的研究が盛んに行われてきた。これらの中新統からは、特に、前期中新世の明世動物群や中期中新世最温暖期（Mid-Miocene Climatic Optimum）の門ノ沢動物群を特徴づける貝化石が豊富に産出することで知られている。近年、微化石に基づく生層序学的研究が進み、瀬戸内区中新統の海成層は、相対的海水準が上昇した4つの期間に形成されたことが明らかにされた。このように、瀬戸内区中新統は、前期から中期中新世における汎世界的な気候変動や日本列島の構造運動に関連した古環境や動植物群の時間空間的变化を知る上で、最も適したフィールドである。本巡検では、近畿地方に分布する瀬戸内区中新統の代表的な地層である滋賀県甲賀市の鮎河層群と京都府綴喜郡宇治田原町の綴喜層群の分布域に赴き、これらの浅海成層と明世動物群を構成する貝化石群集の観察を通じて、両層群の対比や当時の古環境について理解する。

ノート 微動アレイ探査の概説：特に浅部地質調査への適用を見据えて

長 郁夫

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2023.0004>

A microtremor array survey is a tool for modeling subsurface S-wave velocity structure using small ground oscillations, or microtremors, which can be recorded by multiple seismometers at the surface. This paper presents an overview of the method, including the principles, some warnings, and an example survey. In some parts, we focus on the application of the method to shallow geological surveys, to depths of several tens of meters. For further interested readers, we finally list the pieces of literature for review.

報告 福井市西部に分布する中新世貫入岩類の岩石学的特徴およびK-Ar年代

三好雅也, 長谷川ゆりの, 佐野貴司

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2023.0006>

We report the petrographic characteristics, major and trace element compositions, and K-Ar ages of Miocene intrusive rocks from western Fukui, central Japan. The intrusive rock samples were basaltic to dacitic ($\text{SiO}_2 = 51.1\text{--}69.6 \text{ wt.}\%$) and were divided into four different rock types based on their modal and major element compositions: basalt and basaltic andesite, andesite, pyroxene dacite, and hornblende dacite. The compositions

of the samples showed a tholeiitic trend and were plotted in the medium-K field. The MORB-normalized trace element patterns of the intrusive rock samples were similar to those of the Kunimidake Volcanic Rocks and Ichinose Rhyolite, which are located in the same area. The K-Ar ages of the plagioclase in the samples from the NNW-SSE-trending dike (pyroxene dacite) and stock (andesite) were 14–12 Ma and were slightly younger than those of the Ichinose Rhyolite and Kunimidake Volcanic Rocks (15–14 Ma). These observations indicate that multiple supplies of basaltic to dacitic magmas occurred subsequent to the activities of the Ichinose Rhyolite and Kunimidake Volcanic Rocks after the opening of the Japan Sea.

フォト チベット高原南部ムスタン地方における中新統～鮮新統の古土壌

葉田野 希, ギャワリ バブラム, 吉田孝紀

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2023.0009>



第2図. Tetang 層とThakkhola 層の露頭（地点1）。灰色の地層がTetang 層（写真下部）、褐色の地層がThakkhola 層（写真上部）であり、両層は不整合面で接する。

(金融機関用)

令和 年 月 日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書(収加)

私は、SMBCファイナンスサービス株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社	SMBCファイナンスサービス株式会社	振替日 (払込日)	6日・23日(金融機関休業日の場合は翌営業日)
--------	--------------------	--------------	-------------------------

(フリガナ)		申込人名		申込人住所		〒	
						☎	

ゆうちょ銀行以外の銀行またはゆうちょ銀行のどちらか一方に記入して下さい。

ゆうちょ銀行以外の銀行	金融機関コード		支店コード		預金種目 (どちらかに○印)	口座番号 (右詰めでご記入ください。)
					1. 普通 2. 当座	
	(フリガナ)		銀行組合	本店支店		金融機関 お届け印
	口座名義人					

法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。

お届け印(捺印)
ゆうちょ銀行を除く

金融機関へのお届け印ですか
ご注意!

ゆうちょ銀行	(フリガナ)		口座名義人		ゆうちょ銀行 お届け印
	種目コード	契約種別コード	記号(6桁目がある場合は※欄にご記入下さい)	番号(右詰めでご記入ください。)	
	166	301	0※		

払込先口座番号	00110-5-58830	払込先 加入者名	SMBCファイナンスサービス株式会社
---------	---------------	-------------	--------------------

(収納企業使用欄)

収納企業名	一般社団法人 日本地質学会	料金等の 種類	会費等
契約者番号	委託者コード 18476000	顧客コード 000000	

一預金口座振替規定一 ※ゆうちょ銀行払いは除く。

- 銀行(金庫・組合)に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
- 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額(当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。)をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。
- この契約を解約するときは、私から銀行(金庫・組合)に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行(金庫・組合)はこの契約が終了したものととして取扱ってさしつかえありません。
- この預金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行(金庫・組合)の責めによる場合を除き、銀行(金庫・組合)には迷惑をかけません。

ゆうちょ銀行をご指定の場合は自動払込み規定が適用されます。

(金融機関へお願い)

この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

◎書類の流れ お客様→収納企業→SMBCファイナンスサービス→金融機関

金融機関 使用欄	(不備返却事由)			
	1. 預金(貯金)取引なし 3. 印鑑相違 2. 記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、 通帳記号、通帳番号、口座名義 4. その他()			
	備考			
	検印	印鑑照合	受付印	

取
扱
店
日
附
出

不備返却先

SMBCファイナンスサービス(株)
決済ビジネス業務センター 口座振替依頼書課
〒105-8625 東京都港区新橋1-8-4 SMBC新橋ビル

裏面のりしろ①

84 円
切 手 付
貼

101-0032

一般社団法人日本地質学会
一丁目八―一五 井桁ビル内
東京都千代田区岩本町

裏面のりしろ③

氏 名
住 所

のりしろ③

のりしろ①

キ
リ
ト
リ
線

オ
リ
線

御 中

裏面のりしろ②

のりしろ②

キ

リ
ト

線

入会のご案内

入会ご希望の方は下記の入会申込書を一般社団法人日本地質学会事務局へお送りください。
入会には正会員1名の紹介が必要です。近くに紹介者となるべき会員がない場合は旨お申し出ください。また、初年度の会費は申込書郵送時から時間の間隔をおかずに下記送金先へ速やかにご送金ください。会員としての正式登録は、入会承認後、初年度会費の入金を確認した上で行い、News誌の送付(4月号から)を開始いたします。

申込書郵送先: 101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 一般社団法人日本地質学会
会費送金先: 郵便振替口座 00140-8-28067 一般社団法人日本地質学会
ゆうちょ銀行 ○ー九(ゼロイチキョク)店/当座 0028067 / 一般社団法人日本地質学会 シヤニホシツガツカイ
会費年額: 正会員(一般会員・シニア会員) 12,000円 ※1
正会員(学生会員) 5,000円/年、2年パック会費額: 8000円、3年パック会費額: 9000円) ※2
ジュニア会員 0円(年会費不要) ※3

※1: シニア会員は、入会年度の4月1日時点で65歳以上のかたを対象とします(4/2以降に65歳になる方は次年度からシニア会員となります)。
※2: 学生会員は、次の2点を守って手続して下さい。①学生証の写しを提出すること。②バック制会費を希望の場合は一括納入すること。
※3: ジュニア会員は、正会員の権利は有しません。学術大会での発表はジュニアセッションに限定します。

*会員番号

* "学記記入欄 : Official use only"

*会員種別 ☐ 正会員 (☐ 一般 ☐ シニア ☐ 学生) ☐ ジュニア会員

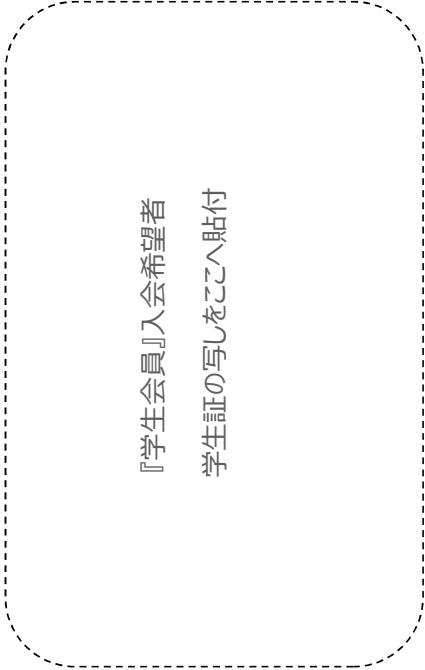
一般社団法人日本地質学会入会申込書 Application form for the Geological Society of Japan

太宰内のみにご記入ください

氏名(ふりがな)	Name in Japanese	ローマ字表記	family name	first name
____年Year____月Mo____日Day	生born on	Sex: ☐ 男Male ☐ 女Female	Country:	
学歴 Academic career:				
____学校 High school ____年卒業 Year completed				
____大学 University ____学部 Faculty ____年____月卒業(見込み) Year completed				
修士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月修了(見込み) Year completed				
博士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年____月修了(見込み) Year completed				
※学生証の写し忘れずに添えて下さい。				
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code ____ - ____)				

電話 Phone: ____	ファックス Fax: ____
所属機関名称・所属機関住所 Affiliation with address: (郵便番号 Zip code ____ - ____)	
電話 Phone: ____	ファックス Fax: ____
e-mail Address: ____@____	
※e-mail Addressは地質学会からのメルマガ配信用。その他連絡用に登録します。携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登録いたしません。ご注意ください。 ※所属先(代表)の問い合わせ専用 e-mail Address は記入しないでください。	
連絡先 Correspondence: ☐ 自宅 Home ☐ 所属機関 Office	

*受付(____年____月____日)	*承認(____年____月____日)	*入金(____年____月____日)	*振替・現金・銀行・他	*送本(____巻____号)
----------------------	----------------------	----------------------	-------------	-----------------



会員情報について: 在会者に限定し、Web版の会員管理システムにて会員情報の検索・閲覧をすることができます。氏名・所属先は掲載必須項目です。下記の項目について掲載を拒否する項目には **□ にチェックを付けてください(チェックが無い項目は掲載承認いただいたものとします)**。

☐ 最終学歴 ☐ 所属先学科名・部課名(掲載不可の場合は「〇〇大学〇〇学部」, 「株式会社〇〇〇〇」までを必須項目として掲載)
☐ 所属先住所 ☐ 所属先電話・FAX番号 ☐ 自宅住所 ☐ 自宅電話・FAX番号 ☐ e-mail Address
紹介者名(正会員) _____ 印
Recommended by (name of member) _____ Signature

(学生のかた) 希望する会費額を選択して下さい。バック制会費選択者は、該当するバック制会費額を一括納入して下さい。 ☐ 5,000円(初年度のみ) / ☐ 2年バック: 8,000円(初年度・次年度) / ☐ 3年バック: 9,000円(初年度・次年度・次次年度) ☐ 学生会員として入会希望です。 学生証の写し を入会申込書に添えて提出します。

専門部会の選択(任意) 現在、下記の14の専門部会が有り活動しています。専門部会に参加ご希望の方は登録をお願いします。所属希望の部会を3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい) 1. 地域地質 2. 層序 3. 堆積地質 4. 海洋地質 5. 構造地質 6. 岩石 7. 火山 8. 応用地質 9. 環境地質 10. 情報地質 11. 古生物 12. 第四紀地質 13. 環境変動史 14. 鉱物資源
--

興味専門分野の選択(任意) あなたの興味専門分野を教えてください。3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい) 1. 層位 2. 堆積・堆積岩 3. 古生物 4. 構造地質 5. 火山・火山岩 6. 深成岩 7. 変成岩 8. 鉱床地質(金属・非金属) 9. 鉱床 10. 鉱物 11. 燃料地質 12. 地熱 13. 第四紀 14. 環境地質 15. 都市地質 16. 土木地質 17. 土質工学 18. 水文地質 19. 探査地質 20. 土木工学 21. 情報地質 22. 地震地質 23. 海洋地質 24. 地球物理 25. 地球化学 26. 地質年代学 27. 地理 28. 地学教育 29. 考古学 30. その他 40. 地球惑星
--

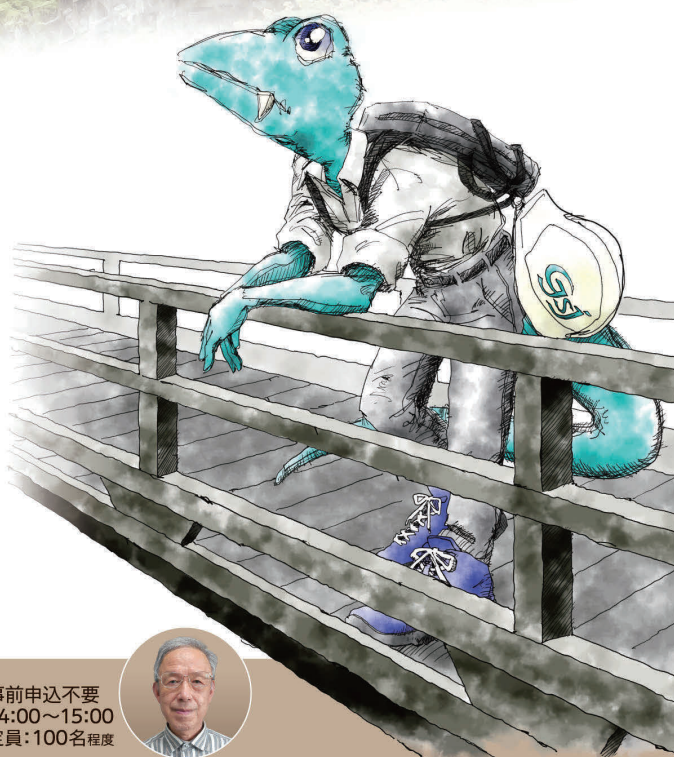
(注)ご提供いただいた個人情報は、日本地質学会プライバシーポリシーに基づき適切に取り扱います。				
*入金(____年____月____日)	*振替・現金・銀行・他	*送本(____巻____号)		

地質を知って まもる 古都の未来

地質情報展
2023きょうと

2023

9/16_土~18_祝



時間

16日 13:00~17:00

17日 9:30~17:00

18日 9:30~16:00

※最終入場は終了時刻の30分前

会場

京都大学

吉田キャンパス 吉田南1号館地階

展示

京都周辺の地震災害と
地質情報

地盤の揺れ実験、液状化実験など
体験学習コーナーもあります

入場無料

※入場制限が付くことがあります

※展示内容が予告なく変更される場合があります

講演

事前申込不要
14:00~15:00
定員:100名程度



9/16_土

「遺跡は語る 京都を襲った大地震」

講師:寒川 旭(産総研名誉リサーチャー)

18_祝

「京都の土地のなりたち・京都府の岩石」

講師:小松原琢・武藤 俊 (GSJ)

国立研究開発法人産業技術総合研究所

一般社団法人

主催:GSJ 地質調査総合センター・関西センター、日本地質学会

共催:山陰海岸ジオパーク推進協議会

特定非営利活動法人

後援:京都市、京都市教育委員会、日本ジオパークネットワーク、

一般社団法人

株式会社

関西地質調査業協会、京都新聞社、NHK京都放送局

お問い合わせ:事務局

TEL : 029-861-3540

Email : M-johoten2023k-ml@aist.go.jp

URL : <https://www.gsj.jp/event/johoten/>